

古里のちから

～ 東 豊 台 の 変 遷 ～



豊中市東豊台公民分館

東豊台公民分館50周年によせて

東豊台公民分館は、東豊台小学校が東豊中小学校から分離開校した1年半後の昭和51年4月に空き教室を利用して活動を開始しました。

地域住民の親睦と教養の向上、生涯教育の場として東豊台公民分館の長きにわたる活動を顧みますと、歴代分館長をはじめ、運営委員、各諸団体の役員のみなさま、地域住民のみなさまのたゆまぬ努力と良きご理解ご協力の上に本年を迎えることができたことを深く感謝申し上げます。

豊中市内における分館活動において、構成員の高齢化や人手不足が心配される昨今、東豊台公民分館では若い世代のメンバーも加わり、経験豊富な従来のメンバーとともに新しいアイデアについて活発に話し合われています。

体育祭、講座、子ども教室、社会見学など恒例のイベントのほかに、周年事業として50周年記念文化祭、50周年を祝う会が企画され、また10年前に東豊台公民分館が発行した「古里のちから～東豊中の変遷～」をデジタル化するという事も決定しています。

「古里のちから」は、公民分館40周年当時の「大人の教室 史跡ハイキング」のメンバー8名（金子時治・久保井芳継・佐藤智昭・中安紀夫・服部隆夫・古八英之・三浦大・矢野洋一）が編集したもので、里山であった熊野田村から、現在の賑やかな東豊台地区になるまでの移り変わりを冊子にまとめたものです。東豊台に愛着をもち、子ども達が郷土の歴史を学ぶための糧とすべく、毎年6年生の授業にも使われています。50周年記念事業としてこの冊子を増刷するにあたり、時代に合わせてデジタル化し、地域のみなさまにも広く触れていただけるように工夫致しました。地域のみなさまの生涯教育の一助となれば幸いです。

ほかに50周年記念防犯イルミネーション、分館だより50周年特別号、東豊台公民分館ゆるキャラ『たけっこ』記念トートバック等々楽しく事業が進んでおります。

これからもより東豊台公民分館らしく、ゆとりと豊かさが実感できる、明るく元気な地域文化を紡いでいけるよう邁進してまいります。今後ともご理解とご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

東豊台公民分館 分館長 藤澤 啓子

祝 辞

豊中市長
長内 繁樹

東豊台公民分館が創立50周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

貴公民分館におかれましては、昭和51年（1976年）の創立以来、公民分館講座をはじめ、文化祭や体育祭など、地域に根ざした取組みを実施されてきました。また、育成サークルなど地域住民の生涯学習を推進し、市民の身近な社会教育機関としての発展を遂げられ、多大なる地域貢献をいただいています。半世紀の長きにわたり、ご尽力を賜りました歴代公民分館長をはじめ、関係者の皆様の熱意と努力に心から敬意を表します。

公民分館活動は、小学校区を基本とし、より地域住民の身近なところで行われる活動として、全国的にも類を見ないものであり、本市の誇る「市民力」「地域力」は、このような活動を通じて醸成されてきました。地域における「つながり」の希薄化が問題となる中、地域の連帯意識や郷土愛を育む公民分館の活動は、今後益々重要なものとなってまいります。

皆様方には、引き続き、開かれた社会教育の振興と地域に根ざした生涯学習の推進を図っていただき、心豊かな地域社会と明るいまちづくりに各段のご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

本市におきましても、皆様とともに、生涯学習や市民スポーツの推進、文化芸術の振興に取り組むとともに、地域コミュニティの更なる活性化を進めてまいります。そして、人と人との出会いやつながりを大切に、いきいきと心豊かに暮らせるまちづくりに全力で取り組んでまいりますので、変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。

結びに、東豊台公民分館が、この記念すべき創立50周年の節目を契機に、今後益々発展されますよう、併せまして、皆様方のご健勝とご多幸をお祈りいたします。

「分館創立50年を祝して」

豊中市教育長 岩元 義継

東豊台公民分館が記念すべき創立50周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。半世紀という長きにわたり、地域で充実した活動を展開して来られましたことにあらためて敬意を表しますとともに、それを支えて来られた歴代の分館長をはじめ、役員の皆様、住民の皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。

東豊台公民分館の創立は、昭和51年（1976年）です。東豊台小学校の創立（昭和49年）から2年後に、公民分館が発足しました。

当時の本市は、戦後の都市化に伴う人口急増期にあり、東豊台小学校もそうした時期に開校しました。地域住民が飛躍的に増え、新しい学校もできた中で活動をスタートされた当時の方々には大変なご苦勞があったことと思います。多くの先人のご努力でそれを乗り越えられ、今では春と秋の講座をはじめ、体育祭や文化祭、社会見学、ハイキングといった多彩な事業を展開されるなど地域コミュニティーの核として発展・成長されました。そしてこの度、50年という記念すべき節目を迎えられましたことを、心より祝福申し上げます。

この50年間で私たちを取り巻く社会環境は大きく変化しました。少子高齢化に伴う人口動態の変化、猛暑や頻発する大雨などの気候変動、インターネット社会を背景とした情報化や国際化の急速な進展など、変化のスピードは速く、先を見通すことが難しい時代になっています。そうした中、地域において人と人をつなぐ公民分館の役割は、今後ますます重要になるものと考えています。

子どもから大人、高齢者まで、誰もが生きがいを持って楽しく学び、いきいきと過ごすことができる地域社会の実現に向け、引き続き皆様のご尽力、お力添えをお願い申し上げます。

結びに、東豊台公民分館の今後ますますの飛躍・発展をご祈念申し上げまして、私の祝辞といたします。

豐中市立東豐台公民分館

創 立 40 周 年 記 念 誌

歴史から学ぶ地域づくり

私は少年時代から青年時代にかけて、淀川水系に面した高槻市唐崎で過ごしていました。そこでは村の古老や青年団からの体験話を聞いたり、時代の移りゆくなかで自身が様々な地域の変遷を経験してきたことが、今の私の地域活動への源となっております。

明治元年（1868年）に隣村の島上郡三島江村（当時の地名）が長雨の水害により淀川が決壊し、三島江村の約50haの土地が1m位土砂に埋まってしまい、村人は稲作もできず、日々の暮らしの目処も立たない苦しい状況に追い込まれる災害が発生しました。しかし、先人たちは将来の希望を失わず、先見性に富んだ英知と努力により、20年計画（明治17年に完成）で耕地の整備事業を行い、淀川に沿って南北100m等間隔、奥行き（東西）500mに農道1間・水路1間（石積）・泥揚げ場1間の計3間を10通り設置しました。

その後、高度経済成長の発展に伴い地域の環境が様変わりする中、当時の自治会役員は、大先輩達が築いた遺産を、尊敬と感謝を含め地域への思いとともにいかに次世代に継承して行くかを熟慮し、再整備することを決断しました。そして昭和46年（1971年）～昭和47年（1972年）にかけて全水路の明示を掘り起こし、幅4.0mの道路と幅1.2mの水路（コンクリート擁壁）を確保し再整備され、今日に至っております。

春はレンゲ（有機肥料の安定志向型農業）、秋にはコスモスロードが現れます。農業を孤立させない新しい発想、視野を広めるなど工夫を凝らした、豊かな田園風景の地域となっております。このことは先祖の遺産を引き継ぎ、工夫と英知を積み重ねて次世代に残すことができた例です。

私たちの祖先は肩肘張らず自然と向き合った生活の中で精神的にも物質的にも満足度の高い生活を営み、故郷の歴史を共有し、故郷愛として成熟した心のゆとりから芽生えたものだと思います。

また、日本人の持つ品位、謙虚さ、自制心などから生まれる特有の価値観は、故郷の文化や伝統、歴史に関心を抱くことから生まれます。故郷の特性を見出すことが誇りを持つことに繋がり、社会的な目覚めの一步を踏み出す礎となります。

今回の冊子は、平成19年（2007）6月30日、第1回史跡ハイキングがスタートし9年間（32回）の探索は「街道を歩く／集落及び村のルーツ探索／豊中の文化財と考古の物差し」等をシリーズ化して豊中市教育委員会生涯学習課の協力の下に、発足来の体験を活かし培ってきた価値観を共有した、仲間8名が試行錯誤しながら先人達が築いてきた歴史に思いを馳せ冊子の制作に携わってきました。

生涯学習の一端として、東豊台地域の過去の歴史を知り、現在を見つめ、未来を創造する過程のなかで、新しい地域家族の誕生とバランスの取れた都市機能を有した街づくりに繋がれば幸いです。

最後になりましたが、編集にあたり多くの方々にご協力を賜り、さまざまな資料をご提供していただき編集委員一同心より感謝申し上げます。

平成28年（2016年）3月31日

豊中市東豊台公民分館 分館長 古八英之

古里のちから

～東豊台の変遷～

目 次

1 東豊台

由来

地形

地形の成り立ち「河岸段丘のできかた」

2 今 昔

先史 「東豊中窯跡」

古代 「熊野田の地名の由来」

中世 「熊田庄の住人」

近世 「検地」「徳川期の熊野田村」「寛文 9 年桜井谷六力村熊野田村山論」

近代 「行政区画の変遷」「箕面有馬電気軌道開通」

東豊台のはじまり

「熊野田村山地の開発」「団地建設」「明日へ」

3 景 観

島熊山／兎川（天竺川）／三ツ池／さくら・メタセコイア／

東豊台小学校／東豊中幼稚園／広教寺／正楽寺／市道上野新田線

4 関連事項（※1～15）

5 変 遷

熊野田村における東豊台地域の「小字名」

地形図に見る東豊台の移り変わり

懐かしい東豊台

東豊台百年

校区の人口及び児童数の推移

東豊台地域年表

1 東豊台

＜由来＞

「東豊台」は、「豊中市立東豊台小学校」の校区の呼称です。昔は摂州（摂津国）豊嶋郡熊野田村の中にありました。豊中市の北東部に位置し、豊中市で最も標高の高い島熊山から南に下る南北に細長い地域で、谷筋に沿って延びる田地や溜池の周りをアカマツなど雑木林や竹林、果樹園などが広く覆う里山でした。

そのような地域に昭和8年（1933）「山あり谷あり起伏に富んだ大自然の景観」と宣伝された住宅地が開発されました。「東豊中町」という地名は、開発された住宅地が、豊中の東に当たるので「東豊中住宅地」と命名されたことが始まりといわれています。

昭和11年（1936）熊野田村・豊中町・麻田村・桜井谷村が合併して、大阪府域で4番目、北摂で初めての市制が施行され「豊中市」が誕生しました。その時に「熊野田村」という住所表示から、豊中市〇〇番地と表記されました。昭和31年（1956）に旧村の中心部の住所表示が「熊野町」として復活した時に、この地域も正式に「東豊中町」になりました。

市道神崎刀根山線沿いに、昭和49年（1974）豊中市として33番目の小学校が開校しました。当初この小学校の校名原案は「上野東小学校」とされましたが、同校は東豊中町6丁目に位置しているので、「上野」と呼ぶのは「所在地の名称を原則とする慣行に反する」との異議がでましたので、市教育委員会は「東豊台小学校」の名称を再提案しました。その理由は、町名と付近一帯が豊島カ丘（東豊中台）と呼ばれる地形から「中」を省略して、「東豊台」と命名されたそうです。

＜地形＞

豊中市域の地形は、北部は千里丘陵、中央部の豊中台地、西南部の猪名川と神崎川に沿う平野部の大きく3つに分かれています。豊中北部の島熊山付近では標高が約120mありますが、豊中南部の神崎川沿いでは5m以下の地域もあり、南北で約100mの高低差があるという起伏に富んだ地形です。

東豊台地区は、豊中市でも標高の高い地域と中央部の台地をつなぐような位置にあるため、北から千里丘陵の尾根がのび、尾根と尾根の間に深い谷がありとても入り組んだ地形です。実際、南の熊野田集落や西の菟川に向かっても、急に下る斜面がたくさんある地形です。東豊台小学校の標高は約33mですが、シャレール東豊中付近になると約40mになり、7mの高低差があります。

この地形は明治20年（1887）に出版された仮製地形図にもよくあらわれ、東豊台地区の周辺でも等高線が密に描かれていますが、現在では開発が進みここまで複雑な地形を目で見て確認することは難しくなっています。



シャレール東豊中と東豊台小学校との高低差

＜地形の成り立ち＞

この高低差のある地形は、どのようにして出来たのでしょうか。今から約 258 万年前、地球は更新世という地質時代に入ります。氷河時代ともいわれていますが、寒い氷期と温かい間氷期を繰り返す厳しい気候変動の時代で、この更新世の中頃まで、約 258 万年から約 20 万年前までにたまった土砂の集まりを大阪層群と呼んでいます。

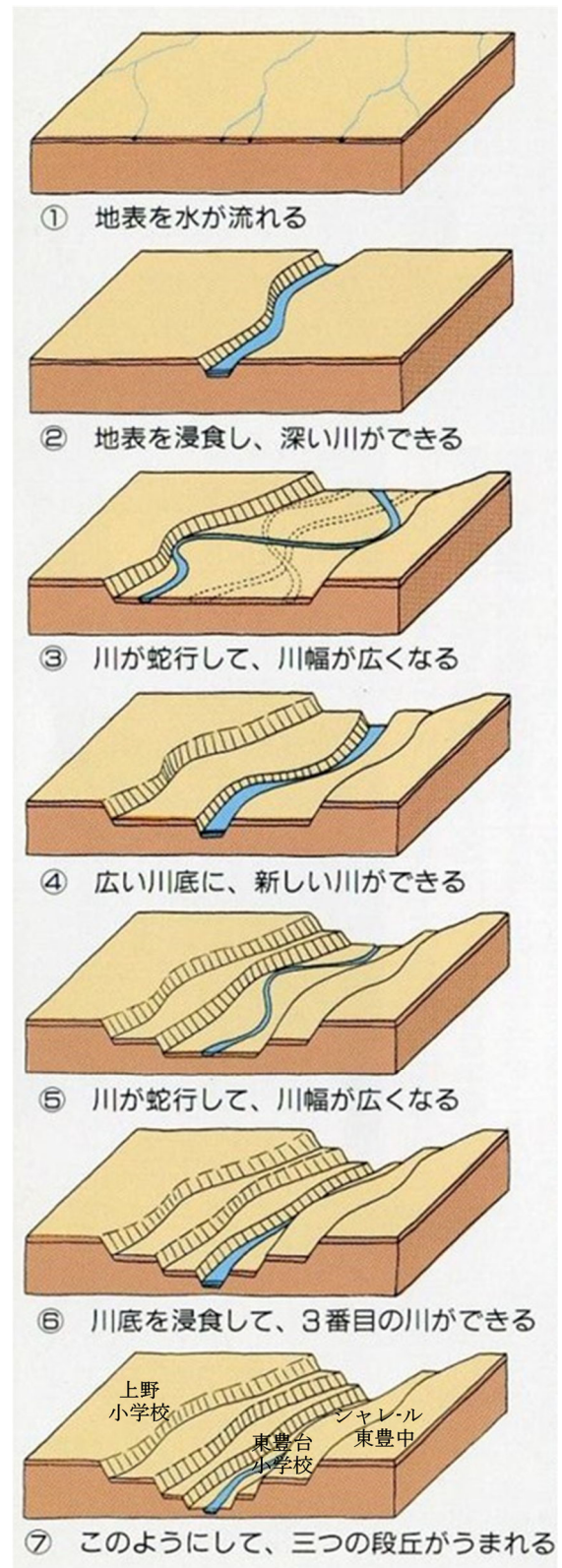
この地層は、海の底にたまった粘土と陸地に洪水でたまった土砂が交互に重なってできています。約 50 万年前になると六甲変動、つまり山が隆起する動きが激しくなり、平原だった豊中周辺でも北部に丘陵ができて、逆に南部の海側は沈降していきました。平原の傾斜がゆるやかだった頃には、兎川は大きく蛇行し丘陵や大阪層群の地層を削り取って下流に堆積させながら大きな広くて浅い谷を作っていきます。逆に隆起すると沈降が激しい時代には、急に傾斜がきつくなるため、兎川などの河川は蛇行する範囲が狭められ勢いよく流れることになります。

こうして平原を広範囲に削ってできた広い谷の中に、また谷が形づくられ、大きく見ると「斜面」と「平坦面」が繰り返し階段状に地形が形成されることを河岸段丘（かがんだんきゅう）といいます。兎川の両岸にも同じような段丘があります。

東豊台小学校の東側の団地（シャレール東豊中）や仏眼寺のある高台は高位段丘（約 30～20 万年前）で、兎川の対岸は通称豊中台地と呼ばれる中位段丘（約 13～8 万年前）です。

今の兎川が流れる市道神崎刀根山線沿いの谷ができる以前、何十万年も前には、上野小学校からシャレール東豊中付近の広い範囲を兎川が蛇行しながら流れていた壮大な風景を想像してみたいかがでしょうか。今から 2 万年前になると河岸段丘が段丘としては最も低い低位段丘（約 7～2 万年前）まで変化するとともに、高くなった丘陵が雨に削られて尾根状の地形と小さな谷地形が複雑に絡み合う地形が兎川の周辺にほぼできあがりました。

「河岸段丘のできかた」



『とよなか文化財ブックレットNo.1』 通史編

2 今昔

<先史>

東豊台に、いつ頃から人が住んでいたのでしょうか。

この地域は、早い段階で開発が進んだことから尾根の地表面が削られる一方、谷は埋め立てられて地形の多くが消えるとともに人間の暮らしの痕跡を知ることはできません。

しかし、すぐそばに残る地形の痕跡や遺跡をたどれば、太古の世界を想像することはできます。上野小学校の地下(上野遺跡)から、縄文時代の石の鏃^{やじり}などがみつかっていますので、縄文時代には東豊台の近くで人間が暮らした痕跡を認めることができます。

200 万年前から気の遠くなるような時間をかけて、自然の営みによって形づくられてきた東豊台周辺の複雑な地形。その特徴を活かして築かれた古墳時代の窯等、時には自然と祖先に想いを馳せながら、兎川沿いを散策してみてもいいでしょう。



TK10 型式の杯蓋と杯身

写真提供 豊中市教育委員会

「東豊中窯跡」

古墳時代中期に、桜井谷周辺で須恵器^{すゑき}の生産が始まります。須恵器と呼ばれるこの焼き物は、縄文土器や弥生土器と違って、轆轤^{ろくろ}を回し、窖窯^{くわう}(あながま)の中でとても高い温度で焼いた土器です。

古墳時代後期(約 1500 年前)には東豊台にも須恵器の窯があったようです。『新修豊中市史 考古編』の「桜井谷窯跡群の分布図」によると、現在の東豊中町 4 丁目の三ツ池台マンションあたりです。

東豊台の周囲には、その他に千里青雲高校西側の「島熊山窯跡遺跡」、上野小学校の北にある青池周辺の「上野青池北畔窯跡^{ほくはん}」や「上野青池南畔窯跡^{なんはん}」、第十五中学校の北西、熊野町 3 丁目の市営住宅付近に、「熊野田遺跡」などがあります。当時は、東豊台地域の斜面でも窯から立ち上がる煙がいくつも見えていたことでしょう。

※1 須恵器

所在地：東豊中町

窯跡の概要：

本窯に関しては窯跡の正確な位置も定かではない。わずかに出土遺物として須恵器杯蓋が知られるが、窯の規模、窯構造などに関するデータは全く知られていない。

遺物：

杯蓋^{つきふた}が採集されているのみで、製作されていた器種構成などについては不明である。

杯蓋はおおむね TK10 型式～TK43 型式(6 世紀後半)に属するものと思われる。

『新修豊中市史 考古編』

＜古代＞

大化の改新(大化元年(645))[諸説あり]によって、今まで豪族が持っていた土地や人々は公地公民となりました。

全国を国・郡・里の組織にし、国には国司、郡には郡司、里には里長がおかれました。収公された土地は班田収授制によって農民に班給され、この実施を円滑にするための「条里制」が施行されました。条里制遺称の「坪名」^{つぼめ}は、豊中台地の西縁から猪名川筋・神崎川筋の低地にかけての地域にあります。熊野田村の「二ノ切」という名も条里制の名残ではないかともいわれています。

養老元年(717)に、里は郷になり地方行政の単位となりました。

豊中の村々が、集落として「名」^{みょう}が現れたのは、およそ10世紀頃からで、承平年間(931～938)に著された「和名類聚抄」^{わみょうるいじゆしやう}によると、摂津豊嶋郡に豊嶋・秦上・秦下・駅家・余戸・桑津・大明の郷名があり、豊中は豊嶋郷の一部、余戸・大明郷の大部分にあたるといわれています。

古代律令時代に、その名を発する豊嶋は西国街道などの主要な経由地でありましたので、万葉集や新古今和歌集に「島熊山」や「待兼山」などの地名が歌われたりしました。 ※2 万葉歌碑



豊中不動尊境内の万葉歌碑

「熊野田の地名の由来」

熊野田集落は、天竺川沿いに関かれた幅広い谷あいにあります。豊中市立教育研究所が発行している『聞き書き・水とくらし』研究紀要・第100号第2集の中の「二ノ切縁起」に「村には七十二の字があり其の内二十四の谷名がつく字があつて…」と記されているように、地形的には盆地のようなところです。

「熊野田」の地名の由来について、伝承によれば、寛和2年(986)花山法皇(天皇在位984～986)がこの地を行幸された時、周りが山に囲まれ紀伊(和歌山県)の熊野三山の地形に似ていることから、導者の僧仏眼に命じて熊野に模して、ここに詣でると熊野三山(熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社)と同じ霊験が得られる神社仏閣(宝珠寺と葛上神祠^{くすがみしんじ}(八坂神社))を営んだことにちなむそうです。

熊野にかわる土地ということで、宝珠寺の山号を熊野代山^{くまのだいざん}と呼び、これより地名を「熊野代」^{くまのだい}と名付け、いつしか「熊野代」が訛って「くまんだい」と呼ばれるようになり、後に「熊野田」の漢字が当てられたとされています。花山法皇は、西国三十三ヶ所観音霊場(現在の西国三十三ヶ所巡り)の中興の祖として知られています。

※ 3 熊野田村



宝珠寺にある熊野代山の石柱

写真提供 豊中八坂神社

＜中世＞

8世紀頃に朝廷は開墾を奨励する目的で「墾田永年私財法」を発布しました。この法によって開墾地の私有が認められ、貴族や寺社が土地所有に乗り出してきました（荘園）。これにともない公地公民制は崩れ荘園の時代へと移っていきました。

豊中市域の荘園としては、垂水西牧の桜井郷・榎坂郷・萱野郷・六車郷や利倉荘・棕橋荘などがありました。源平争乱の時、寿永2年（1183）には、近衛基通によって垂水西牧は春日社に寄進されます。 ※4 垂水西牧

文治元年（1185）[諸説あり]に、源頼朝が鎌倉幕府を開き、その御家人を守護・地頭として全国に派遣したことで、今まで貴族や寺院が所有していた荘園の所有権をめぐる争いがありました。承久3年（1221）には、豊中市庄内一帯に広がる荘園(棕橋庄・長江庄)の所領をめぐる後鳥羽上皇(寵姫 亀菊)と執権北条義時の争いがありました。

室町時代後半、応仁元年（1467）に勃発した応仁の乱以降、戦乱の世となりますが、これを契機に荘園制が壊滅していきました。

荘園秩序の動揺に対応して、人々は支配の枠を越えて地域的に、ひとつのまとまりを示し共同の生活に従う傾向を強めました。村の中に自治的な活動を目的とした組織も形成され、農村は惣村(農民の地域的自治結合)へ発展し小村独立が多くなったといわれています。

明治22年（1889）に市町村制が施行されるまでは、現在の豊中市域に41の村がありました。その起源は、ほとんどがこの頃だといわれています。

「熊田庄の住人」

応永8年（1401）7月に作成された「春日社領垂水西牧田数帳」（今西家文書）に「熊野田村拾町公田^{さだめ}定」と初めて「熊野田村」という村名が現れます。これは、熊野田村にあった春日社領の田数と考えられます。

一方『北野社家日記』長享元年（1487）条所引の「北野社領注文」によって、熊野田領家職が寛正2年（1461）に近衛家からの寄進によって京都北野社宝成院・貞福院領となったこと。

文明10年（1479）の「後法興院雑事要録」（陽明文庫蔵）では、近衛家領として「熊野田村拾八貫余（米銭）」として見えます。このように15世紀後半の熊野田村には、春日社、北野社、近衛家の荘園領主がいました。

戦国末期の熊野田村には、のちに豊後岡藩中川氏の重臣となる熊田氏という土豪がいましたが、こうした複雑な租税徴収関係を整理していたのが、熊田氏のような階層だったのでしょう。

平成3年（1991）に行われた熊野田遺跡の第1次調査によりますと鎌倉時代末～室町時代初め（14世紀）の溝で囲まれた屋敷地も見つかっていますが、熊田氏の居館ではないかと考えられています。

熊田氏が熊野田村を去ったころは、戦国時代が終わり、以後、織田、豊臣、徳川氏が新しい支配秩序をつくっていきました。

※5 熊田氏及び中川清秀

＜近世＞

「検地」

豊臣政権になると、領土の帰属を決定する権限が秀吉に属することを宣言し、私的に武力を行使して問題を解決することを否定しました。それは、山論や水論にも適用し、以後紛争解決における村々の自律性は大きく制限されることになりました。いわゆる「刀狩り」や「検地」を実施しました。

村は中世の荘園・惣(農民の地域的自治結合)を解体して、米の収穫高を基本とした石高制による村切で、一つの村の平均石高を 300~400 石にしました(例外として石高が 500 石や 1000 石を越える村もあります)。

※6 検地・小物成山・米の品質

[熊野田村の太閤検地]

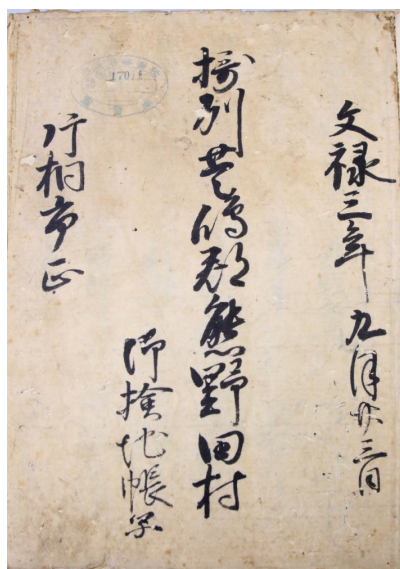
文禄3年（1594）9月23日

村高：429石6升7合

家数：71 軒

總反別田畑合計：90 町 9 反 1 畝 18 步

検地奉行：片桐市正(且元)



『摄州豊嶋郡熊野田村御檢地帳写』

大阪大学所蔵



『摂州豊嶋郡熊野田村御検地帳写』（高町付近）

大阪大学所蔵

[illegible]

『豊中市史』史料編 4（高町付近）

『摂州豊嶋郡熊野田村御検地帳写』には、現在の東豊台小学校付近の小字名「高町」が記載されています。文禄年間当時は、小学校付近一帯が田んぼであったことを示しています。

「徳川期の熊野田村」

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに勝利したことにより徳川家康の覇権が確立し、全国の所領の再配置を行いました。

徳川幕府は畿内地方の支配形態として、大坂城を核に大坂三郷(現在の大阪市)を幕府直轄の天領としました。外周 10~15km に旗本などの領地を配し、それ以遠に畿内以外にいた大名の飛び地を配置しました。

豊嶋郡は京都、大阪に近く、政治的、経済的に重要な地域でありましたので、農業生産を破壊しない程度に分割し、大名領・旗本領・天領など入組支配を行っていました。熊野田村は、山方(桜井谷村との境界、現在の中央環状線付近)が幕府支配の小物成場で、村の住居や田畑は南方の^{まいた}蒔田氏領を中心に広がっていました。

山方・村方を合わせると、現在の豊中市域の村々のなかで一、二を争う面積を有していました。徳川期から昭和11年(1936)に豊中市になるまで、数百年にわたり一村単体で村行政を行う状態が続きました。そのことは、他の村が、複数の領主の支配を受けたり、明治に入ると隣村と合併したりと、政治上・民生上の苦勞を重ねてきたのに比べ、比較的自村内のみの規範で暮らしていくことを可能にしたといえるでしょう。※7 蒔田氏

農村だった熊野田村の暮らしは、その地形とも深く結びついていました。丘陵部では、「慶長～元和年間(1600頃～1620頃)」や、「寛文9年(1669)」・「宝暦の争い(1762頃)」など、山の収益権や入会権(山論)をめぐる争いがしばしば起こりました。

農作業に必要な水の利用をめぐる争い(水論)なども多くありました。水の確保が難しい地域で、東豊台地域周辺においても、深谷池・三ツ池・青池・二ノ切池・西谷池など、いたる所に池を設けています。 ※8 山論・水論

「寛文9年桜井谷六カ村熊野田村山論」

東豊台地域に関連した事例としては、「寛文9年(1669)」の山論があります。

天竺川支流である兎川に沿って上流に位置する字竹谷及び字滝谷あたりの開発された田地を巡り、摂津国豊嶋郡熊野田村(旗本蒔田氏知行所)と同国同郡のうち桜井谷六カ村と呼ばれた野畑村(武蔵岡部藩安部氏領・幕府領)、少路村(同前)、内田村(同前)、柴原村(同前)、南刀根山村(同前)、北刀根山村(武蔵岡部藩安部氏領)が争った山論です。

熊野田村側から提訴し、この支配は京都町奉行所があたりました。下された裁許は、論所に双方

の本田が存在することを確認したうえで境界を確定するというものでした。

境界筋については『新修豊中市史・社会経済編』には「市道緑丘上野坂線が通る上野坂1・2丁目と東豊中町1丁目の間は、北に向かって西方に弧を描くように坂を上っていく。それはちょうど「上野坂下」のバス停から「上野坂1丁目」のバス停を抜け「島熊山」のバス停に至る間におおよそ相当する。この境界が公に定められたのは、今から300年以上の前の江戸時代のことであった」とあります。

境界は『寛文十年桜井谷六カ村熊野田村山論裁許絵図』に記されています。

こうして定められたこの境界線は、今日に至るまでも、特徴的な西方への弓なりの膨らみに認められるように、上野坂及び東豊中町あたりの行政区画にその形跡の一部を残すことになりました。

竹谷山は字名から東豊中町2丁目の中央環状線沿い、字滝谷は現在グランドメゾン東豊中あたりと思われます。

山論や水論など他村との交渉もありますが、村の中でもいろんな規約がありました。江戸期の村は、庄屋・年寄・百姓代の村方三役が中心になって、「村寄り合い」など村中が結束し運営されていました。

農業用水、山野林の共同利用については村の約定によって利用し、水田の代かき・田植えの際の水落とし・山や野のまぐさ・肥料・薪などの採集は個人が勝手にできない不文律があって、これを破ると「村八分」等の厳しい罰則が科せられました。 ※9 延宝検地

『寛文十年桜井谷六ヵ村熊野田村山論裁許絵図』に描かれた地域の範囲は、論所である竹谷山をほぼ中心として、北は待兼山を越えて西国街道沿いの牧落村（箕面市）まで、南は長興寺村まで、東は天竺川支流の兎川筋あたりまで、西は南北刀根山村集落の向こうの刀根山までとなっており 17 世紀の東豊台地区周辺の景観がわかる貴重な絵図です。

右の写真は、下の絵図の★から上へ向かって写したものです。



上野坂 1 丁目付近 ★から見る竹谷山付近



『寛文十年桜井谷六ヵ村熊野田村山論裁許絵図』

写真提供 豊中市教育委員会

<近代>

明治以降、熊野田村の行政区画の変遷

年 代	行 政 区 画 の 変 遷
明治 5 年 (1872)	豊嶋郡第 2 区 9 番組熊野田村 (庄屋・年寄などを廃し、区長・戸長・副戸長を置く)
明治 8 年 (1875)	豊嶋郡 10 大区 2 小区 9 番組熊野田村
明治 10 年 (1877)	豊嶋郡 10 大区 2 小区熊野田村
明治 12 年 (1879)	豊嶋郡 14 分画熊野田村 官治制から自治制に。(各村が独立して村会をもつ)
明治 17 年 (1884)	豊嶋郡 12 戸長役場管理区域熊野田村
明治 22 年 (1889)	豊嶋郡熊野田村 (市町村制施行後、正式に熊野田村になる)
明治 29 年 (1896)	豊能郡熊野田村 (豊嶋郡・能勢郡合併)
昭和 11 年 (1936)	豊中市 (熊野田村・豊中町・桜井谷村・麻田村合併)

「行政区画の変遷」

明治 2 年(1869)の版籍奉還によって、版(土地)籍(領民)は幕府から朝廷に奉還され行政権は明治新政府に移されました。

新政府は、天皇制中央集権国家に移行するために戸籍の整備をはじめ、地租改正・貨幣制度・学校制度・徴兵制・憲法制定など、いろんな改革を行いました。

なかでも江戸時代の封建制度のもとにあった村落共同体を解体し、新たな時代の自治体として組織し直すことを急いだため、郡・町・村の旧来の区画や、庄屋などの村役人組織を排除して府県・大区・小区という新区画をつくり、区長・戸長という新設の官吏に国家行政の一翼を担わせようとなりました。

しかし、古くからの慣習に基づかない新制度は、混乱や紛争を招き、政府は新たな対応に迫られて、その後たびたび法令の改正を行いました。

そうして結局は、市町村という新たな自治体にも旧来の村落の面影が残ることになりました。

「箕面有馬電気軌道開通」

豊中市域は明治の頃、国道・国鉄の空白地になっていて、京都方面へ行く人は吹田まで、神戸方面に行く人は大阪まで徒歩という状況でした。

そんな中、箕面有馬電気軌道株式会社(現 阪急電鉄)が、明治 43 年(1910)3 月 10 日に梅田～宝塚間の 24.9km と箕面支線 4km を開業しました。市域内の駅は開通当時、服部天神と岡町の 2 駅のみで「ガラアキで涼しい電車」と宣伝されたほど、乗降客は少なく、沿線は藁屋根農家や丘陵地が点在する純農村地帯でした。

電車開通と同時に電気供給事業を企画出願し、明治 43 年(1910)7 月 1 日より、沿線各町村や同社経営の住宅地に電灯が普及していきました。それまで熊野田村ではランプを使用していましたが、大正 4 年(1915)頃から電灯が点くようになったそうです。

その後、昭和 17 年(1942)国家総動員法により関西配電株式会社(現 関西電力)が設立されるまで、長く阪神急行電鉄(大正 7 年(1918)に箕面有馬電気軌道が名称変更)から電力を供給されました。

電鉄会社が、住宅地開発を始めたことが農村地帯であった豊中が現在のような住宅都市へと成長するきっかけとなりました。

明治45年（1912）岡町住宅地の開発。大阪市の人口が150万に達した大正3年（1914）豊中住宅地。大正9年（1920）新屋敷・北屋敷住宅地など豊中の住宅地化は電車線路の西方から発展しました。

大正10年（1921）には北大阪土地会社が上野方面に経営地を開くと同時に、大正11年（1922）に豊中中学校（現 府立豊中高校）が開校、大正15年（1926）には梅花高等女学校（現 梅花中学・高校）移転など、豊中の住宅地が東北部に伸びる契機になりました。

このように、明治時代の後半から昭和の初め頃にかけて、豊中市域は大いに発展しました。それはひとえに鉄道の発達、とくに現在の普及率全国一と称されている関西私鉄の多くがこの期間に開通し、これによって豊中市域と大阪市、あるいは周辺都市との時間的距離が短縮されたためです。

いずれにしても電車の開業は、その後の熊野田村そして東豊台地域に大きな影響を与えました。

※10 箕面有馬電気軌道



開業当時の神崎川を渡る箕面有馬電気軌道

写真提供 豊中市広報広聴課

＜東豊台のはじまり＞

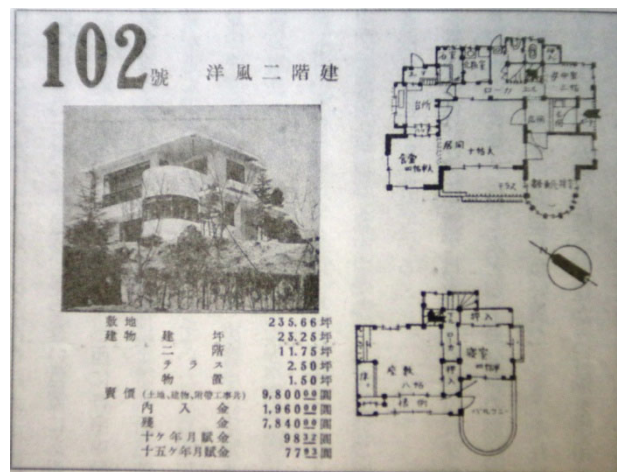
「熊野田村山地の開発」

昭和8年（1933）から売り出された東豊中住宅地は、江戸期の^{こものなりやま}小物成山で広大な松林であった丘陵地の島熊山から三ツ池にかけて造成したもので、開発規模23万5000坪（77万5500㎡）と阪神急行電鉄（現 阪急電鉄）がその沿線に経営したものとしては最大のものでした。

起伏に富んだ地形を切り開いて住宅地にしたので、坪あたり10～12円で土地付き住宅5700～10500円で売り出されたようです。

宅地としての造成は最低限に抑えられ、自然地形を多く残した開発でもあり、テラスを備えた洋風住宅や切妻屋根の棟門や格子門などをもつ数寄屋風の純和風住宅など、高級住宅地にふさわしい風格ある建物が建設されました。

※11 国登録有形文化財



東豊中住宅の案内パンフレット

写真提供 豊中市文書館

従来、住宅地の経営は、駅から1km圏（徒歩約15分）に行われるのを原則としていました。東豊中住宅地は徒歩圏を越えて、駅から2.5km、徒歩約30分という、やや遠い位置にあるという異色の住宅地でしたが、乗合バスが豊中中学前まで開通していたため住宅の完成に伴い、バス路線を東豊中住宅地まで延長しました。

こうした交通網の発達が東豊中方面の丘陵地のさらなる開拓を後押しすることになりました。

同様にバスの走る高級住宅地という新機軸をもって昭和 7 年（1932）に開発されたのが野畑住宅地（現 永楽荘）でしたが、野畑は依然として井戸水利用であったのに対し、東豊中住宅では専用の水道が確保されており、近代的な暮らしが実現していました。 ※12 乗合バス

こうした住宅地の発展にともなう急激な人口の増加によって、道路・保健衛生・水道・教育などの課題解決は、一つの村・町では困難になってきました。熊野田村は他村と協力して村行政を行うべく、昭和 11 年（1936）発足の豊中市への合流に舵をきることになりました。

この頃から東豊中・東豊台の歴史がはじまります。昭和 30 年（1955）頃の上野小学校から見た東豊台地域のような『豊中ありし日の景観(鹿島友治氏著)』に、「北東は兎川の低地(そのあたりは水田)の向こう東豊中住宅地は、林間に家々の屋根が見えかくれて見渡された。目を東方に転じると、学校のすぐ東側崖下は、かなり広い竹藪であり、それより兎川に下って、その向こうは高低波うつ雑木林の丘陵であった」と書かれているように、当時の東豊台地域は雑木林あり、小川(兎川)あり、水田あり、畑ありの自然豊かな里山でした。

※13 水道施設

当時の熊野田村の人口の変化

年 代	人 口
昭和元年（1926）	1855
2 年（1927）	1880
3 年（1928）	1905
4 年（1929）	1985
5 年（1930）	2010
6 年（1931）	2042
7 年（1932）	2062
8 年（1933） 東豊中住宅開発	2295
9 年（1934）	2884
10 年（1935）	3169

『翔け明日へ(くらしとともに 70 年)』通史編

「団地建設」

東豊台地域が、大きく発展したのは団地の建設でした。戦後（1945 以降）、住宅難の時代に、政府の住宅対策の一つに大都市ならびにその周辺部に「団地」と呼ばれる鉄筋の高層アパート群が建設されました。公団住宅は中産階級をおもな対象として若いサラリーマンが多く少人数の核家族という特色をもっていました。

東豊中団地は、関西 5 大団地の一つとして昭和 34 年（1959）に工事開始、13 万 5600 m²の敷地に 1524 戸の戸数を建設、昭和 35 年（1960）から入居が開始されました。この団地は、千里山丘陵西斜面の丘陵ならびに末端侵蝕谷を利用したもので、農地の買収のような制約も少なく、広い丘陵地を安く、しかも一括買収が容易であったため大規模な団地経営が可能となったそうです。関西では、まだ珍しかったレジ形式のスーパーマーケット「セントラル」も開店しました。

他では、あまり見られない五角形の「スターハウス」通称「星形(ほしがた)」という建物もありました。雨が降ったら長靴を履いて通勤した程のデコボコ道(地道)がアスファルト舗装になりました。

昭和 37 年（1962）には、豊中トップセンターが開業。昭和 38 年（1963）には東豊中幼稚園も開園。昭和 30 年代後半（1960 代）には、東豊台を南北に縦断する道路、市道神崎刀根山線も整備されました。

東豊中団地の入居が始まった当時、電話局線不足のため電話が引けず、住民達は外部との通信が不能で、陸の孤島と云われるような不便さがありました。

日本公営住宅文化協会が、局線不足を補う方法として、電電公社(現 NTT)が始めた集団住宅電話（少数の局線を交換所に引き込み、多数の電話機に交換台を通じて接続する方式）を持ち込んできました。このため電話利用希望者が集まり、東豊中集団住宅電話組合を設立し運営をしました。諸問題もありましたが、その都度、住民が協力し解決したそうです。

昭和 43 年（1968）8 月にやっと待望の一般

加入電話(自動電話)に切り替えられました。

昭和 42 年(1967)に、東豊中団地の東に東豊中第 2 団地が完成、東豊中小学校も開校し、子ども達はそれまで通学していた上野小学校から順次、東豊中小学校へ移っていきました。また住民の強い要望もあり、同じ年にゆたか幼稚園(現 ゆたかこども園)と東豊中保育所(現 東豊中こども園)も開園。昭和 44 年(1969)には、東豊中第 1 団地・第 2 団地が兄弟団地として、地域の輪を広げるために東豊中小学校運動場で合同運動会も開催されました。

昭和 45 年(1970)には日本万国博覧会が大阪千里丘陵で開催されました。それに伴い北大阪急行電鉄が開業。桃山台・千里中央へのバス路線の再編、大阪中央環状線や新御堂筋などの道路網の整備で交通が一層便利になりました。マンションや住宅・社宅が次々と建設され、昭和 49 年(1974)に、東豊台小学校が創立。現在のような活気溢れる東豊台に発展しました。

平成 7 年(1995)の阪神淡路大震災の時には被災者のための応急住宅として、空き部屋の提供や被災者を励ますバザー・餅つき大会などを開催した東豊中第 1 団地も、建設されてから 40 年経過した平成 12 年(2000)頃から団地老朽化等に伴う団地建て替えが検討されました。

平成 15 年(2003)から順次、建て替え工事が開始され、675 戸、5 階～13 階建て・18 棟が林立し、お酒落な団地として生まれかわりました。翌年から戻り入居が始まり、団地の名称も「東豊中第 1 団地」から「シャレール東豊中」になりました。「シャレール」とは、「温かい」「真心こもった」という意味だそうです。

「明日へ」

東豊中住宅地が開発されて 80 余年、東豊中団地が建設されて 60 年近くが経ちますが、この地の変わりようは目を見張るばかりです。

山、川、谷、里山なども、昔の面影を思い出すが難しいくらい大きく変わったところもありますが、三ツ池周辺は風致地区として残され、熊野田村の里山の風情を残しています。

東豊中団地内にあった「どんぐり山」「きのこ山」も、平成 15 年(2003)の団地建て替え後は「どんぐり山」「きのこ山」保存委員会が保存、保全活動をしていますし、東豊中団地建設当時に植えられた「メタセコイヤ」も一部残されています。まだまだ自然豊かな緑の多い町といえるのではないのでしょうか。

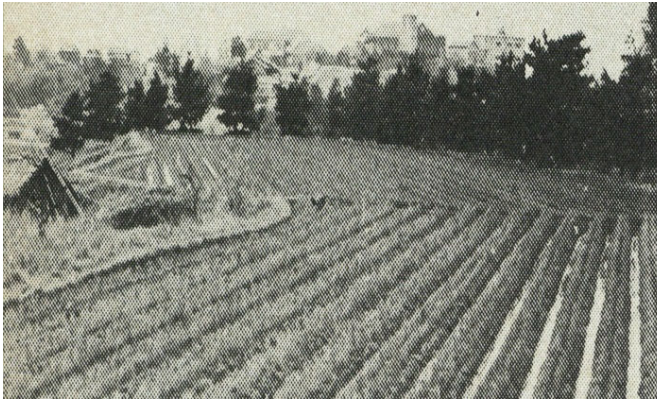
地域の交流の場として「ふるさと・ふれあい・おもいで」をテーマとし、平成元年(1989)にバス通りコープ前で開催された「東豊台まつり」は、地域諸団体が協力し平成 27 年度で 27 回目を迎えました。現在は、東豊台小学校のグラウンドで開催され、家族そろっての参加やこども達の歓声や思い出づくりで賑わっています。

古里の歴史から生まれた環境。そして、先人達が築いてきた「東豊台」。これから先も変化を繰り返しながら、活気ある素晴らしい町に発展していくことでしょう。



東豊台まつり

写真提供 三浦 大氏



昭和 30 年代の東豊中町 6 丁目付近

写真提供 豊中市広報広聴課



平成 14 年頃の東豊中第 1 団地（建て替え前）

写真提供 三浦 大氏



シャレール東豊中



スターハウス（星形）

写真提供 三浦 大氏



スーパーマーケット「セントラル」

写真提供 三浦 大氏

3 景 観

＜島熊山＞

島熊山は、古代万葉の昔から豊中市を代表する山のひとつで、豊中市の北東部、緑丘2丁目一帯にあった山です。享保期（1716～1735）に著された『摂津志』には、「在熊野田村北一名鬼ヶ岳其山嵯峨故名」と書いてあり、往時は陰しく鬼が棲むといい鬼ヶ嶽おにがたけとも呼ばれていたそうです。

島熊山の峰は村の境界になっており、西は桜井谷、水が東に流れると上新田、北に落ちると箕面や萱野や芝の村に流れて、稜線を南にとると熊野田の領分になります。

島熊山の尾根道は、現在の上野東の青池のほとりから尾根伝いに箕面に通じた道で、近在の村人が勝尾寺参詣の際にたどったことで知られています。またこの道は、万葉の時代に難波宮なにわのみやから吹田の垂水を通り、有馬を経て但馬・出雲へ向かう古道とも重なり、古くから北への道として利用されてきたようです。

東豊中住宅が建設された当時、兎を追って東豊中住宅地に迷い込んだ猟師がいたといわれています。晴れた日などは、島熊山の頂上から大阪湾や淡路島まで見えたそうです。

戦後、東豊中住宅から島熊山に続く尾根を通り北西に下って、北緑丘団地あたりから待兼山へ至るルートが、豊中市中央公民館が選定した市民ハイキングコースになっていました。これらの山道は現在、千里ニュータウンを囲む千里緑地として、一部残されているだけで、緑丘から西へ住宅地が広がり、もはや島熊山をはじめとするかつての山容をしのぶことはできません。昭和40年頃には頂上あたりに傘型の一本松があったので「島熊山の一本松」と呼ばれていたそうですが、正確には「番小屋山の一本松」ということでした。

平成12年（2000）8月発行の『広報とよなか』では、「かつての島熊山の山頂は、緑丘2丁目の中国縦貫道の北側にあったが、現在は山の姿をとどめていない」と記載しています。

現在、付近は高級住宅地として知られ昔日の面影は消えました。



シャレール東豊中から島熊山付近を望む



島熊山付近から大阪湾方面を望む

< 兎川（天竺川） >

兎川は、天竺川、神崎川の支流で淀川水系に属する河川です。兎川を上流へ歩いていくと東豊中 1 丁目公園付近から暗渠になっており、源流がどこなのかはわかりませんが、いろいろな資料から兎川は東豊中と上野坂の間の谷より流れ出す川で、深谷池や三ツ池を経て天竺川と合流しているということです。名前の由来は、待兼山から島熊山にかけて野ウサギが生息し、水飲み場所となっていたことから名付けられたといわれています。

兎川は、上新田から流れてくる天竺川と熊野田小学校近くの八坂橋で合流します。この合流地点で天竺川が大きく左へ曲がっていますので大雨のたびに氾濫し「魔の曲がり角」と呼ばれ人々から恐れられていたそうです。

天竺川の名前の由来については、流域にあった天竺山石蓮寺からきたともいい、『摂津名所図』には「常に水なくして平沙永く連り、千歩に及ぶ。故に天竺川の俗称あり」と記されています。

元文元年（1736）の『豊嶋郡誌』（今西家文書）に「沙川ナリ、常水ナシ。水源八島下郡上新田ノ山中ヨリ出テ、小曽根郷と椋橋ノ庄トノ間ニ至ツテ大河ニ入ル」とあるように、千里丘陵の上新田から熊野田を経て小曽根と庄内の境を流れ菰江の三国橋上流で神崎川に合流します。水量はあまりなかったようですが、山川の特徴で時には洪水氾濫の危険をもたらしたようです。大きな氾濫のたびに築堤が繰り返され、ついには周辺民家の高さより河床が高くなる天井川が形成されました。

昭和 11 年（1936）熊野田村が豊中市と合併したお祝いとして、東豊中橋から熊野田小学校の近くの八坂橋の下まで 2km の堤防に桜の木が植えられました。



兎川 出路（東豊中 1 丁目公園付近）



兎川・天竺川 合流点（熊野町 1 丁目付近）



兎川堤防の桜並木（昭和 24～25 年頃）

写真提供 豊中市広報広聴課

＜三ツ池＞

村の周りを山や谷に囲まれていた熊野田村は、俗に「新免・轟木月夜にやける」と言われたほど水に乏しく、台地面の農業耕作物は絶えず灌漑用水の補給に苦しみたびたび旱魃に見舞われたので、農業用水を溜める場所として、たくさんの溜池がつくられています。

寛文 10 年（1670）の山論絵図には、兎川支流筋の谷間を塞ぎとめて築いた「三ツ池」や、段丘崖の末端に築かれた「青池」や「^{うばらいけ}兎原池」などが描かれています。その他に東豊台周辺には深谷池・二ノ切池・西谷池（現在は東豊中小学校グラウンド）などがありました。

この三ツ池や西谷池の水を、近隣の水田へ引くために、豊中ハウス近くに高架の農業用水管がありました。

また、三ツ池や青池では昭和 35 年（1960）頃まで淡水真珠貝の養殖をしていたそうです。三ツ池は、農地の宅地化などで灌漑用ため池としての機能を喪失していますが、東豊中の閑静な住宅地の中にあり風致地区に指定されています。

※14 水利・雨乞い



現在の三ツ池



高架の農業用水管（平成 27 年）

＜さくら・メタセコイア＞

豊中市内には、桜井谷や桜塚などの地名にみられるように、昔から多くのさくらの名所がありますが、東豊台にも多くのさくらがありました。

東豊中住宅のさくらの風景が、鹿島友治氏著作の『豊中ありし日の景観』や『ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 豊中』の中に、以下のように描かれています。「昭和 8 年

（1933）、東豊中住宅が建設された時に、三ツ池の周囲や池の北側から深谷池にかけての東豊中一帯に道路がつけられました。また東豊中のバス停から北西方向にも、ゆるい坂道が延び、尾根に突きあたったところで北東に転じて、稜線沿いに島熊山まで達していますが、住宅建設まもない昭和 10 年（1935）頃、50 戸の住民が「東豊会」という親睦会を結成し、バス終点前に集会所を建て、住民たちが話し合って住宅内の道路の両側にさくらの木を植えてさくら並木としたそうです。アカマツ林と山の池とさくらの花が映えて大層美しい住宅地だったそうです。」

現在では、自動車の発達につれて道路を拡張するため、多くの木が切られてしまい、住宅地内に残っているさくらも数えられる程になりましたが、今では古木となって趣もあります。

三ツ池周辺のさくら並木は、地域の散歩道として親しまれ、四季を通じて市民に安らぎを与える

貴重な存在となっています。

写真提供 三浦 大氏

東豊中橋から熊野田小学校の近くの八坂橋の下までのさくら並木は、周囲の田圃に美しい花影を落とし夏になるとホタルが飛び交い、付近の住宅地の人たちのこよなく愛する散歩道でしたが、現在この付近は名残のさくらが二十数本残っているだけです。今では川の左岸を市道神崎刀根山線が通り、その道に沿って東豊台小学校があります。

昭和 34 年（1959）の東豊中団地（現 シャレール東豊中）建設時に、さくらとメタセコイアが植えられました。さくらは春になると満開、夏には蝉がすずなり、こども達の蝉取りの歓声に包まれる自然豊かな団地でした。

メタセコイアは非常に珍しい木で、スギ科の落葉高木・中国の原産で化石が世界各地の新生代の地層から発見されました。以前は化石だけが知られていましたが、昭和 20 年（1945）に現生のものが発見され一躍話題となりました。

平成 16 年（2004）に団地が建て替えになった時に、さくらは随分少なくなりましたが、メタセコイアは、植えられて半世紀以上になりますがシャレール東豊中の名物となっています。



兎川沿いのさくら並木（昭和 20 年代）

写真提供 豊中市広報広聴課



東豊中第 1 団地のさくら（昭和 40 年代）



東豊中住宅のさくら（昭和 23 年頃）

写真提供 豊中市広報広聴課



東豊中住宅のさくらの木（平成 27 年）



シャレール東豊中のメタセコイア並木

<東豊台小学校>

昭和 8 年（1933）に東豊中住宅ができた頃、子ども達は熊野田尋常小学校に通学していましたが、一部は克明第三尋常小学校（現 大池小学校）へ通学していました。

※15 寺子屋・大池小学校

昭和 24 年（1949）に上野小学校が開校し、東豊台地区の子ども達は上野小学校へ通うようになりました。昭和 35 年（1960）に東豊中団地が入居を開始し、昭和 42 年（1967）には東豊中第 2 団地が完成。同年、東豊中小学校が開校し、子ども達はそれまで通学していた上野小学校から徐々に東豊中小学校へ移りました。その後も校区内にマンションや社宅、住宅が建設され人口も急増していきました。

「東豊台小学校開校」

昭和 49 年（1974）4 月、東豊台小学校が市内 33 番目の小学校として東豊中小学校区から分離して設置開校されました。開校時は、田んぼの中に建築中の校舎が未完成のため、東豊中小学校の一部の教室とプレハブ教室において授業が開始されました。当時の東豊台小学校の南側は、レンゲが咲き、花畑や桃畑だったそうです。

創立時の校長は 須賀 浩氏で、教職員 18 名・用務員 1 名・児童数 432 名（5 学年まで）の出発でした。その年 8 月には新校舎が完成して 2 学期から現在地へ移転しました。小学校校庭の買収交渉が難航し、現在の校庭の南半分は青々とした水田があったそうです。翌、昭和 50 年（1975）1 月になってから、ようやく交渉がまとまり拡張工事が始まり、4 月に校庭拡張は完了しました。

クラブ活動も活発でミニバスケットクラブが、全国大会に昭和 61・63・平成元年度の 3 回、近畿大会に昭和 62 年度の 1 回出場したこともあります。

平成 26 年度で創立 40 周年を迎えた東豊台小学校。卒業生は、平成 31 年 3 月で 3893 名の

子ども達が巣立っています。



東豊台小学校

【東豊台小学校の校区】

東豊中町 1～2 丁目、4 丁目（1～5 番）、
6 丁目（13 番以外）

【東豊台小学校の位置】

北緯 34 度 47 分 30 秒

東経 135 度 28 分 50 秒

【東豊台小学校の標高】

約 33m

東豊台小学校北館東側の外階段とフェンスの間に、とても珍しい木がありました。
羊蹄木（ようていぼく）といいます。

中国名 : 洋紫荊
英語名 : Hong Kong Orchid Tree
学名 : Bauhinia blakeana
科・属名 : マメ科 ハマカズラ属
原産地 : インド
生息地域 : インド～アメリカ

この花は香港市の花になっており、香港のコインのデザインにも使われているそうです。

羊蹄木の花は、香港では 11 月頃に咲くそうです。花が散った後は、藤の花と同じような種を付けています。



東豊台小学校内 羊蹄木の花

写真提供 三浦 大氏

＜東豊中幼稚園＞

昭和 35 年（1960）から、東豊中団地（現 シャレール東豊中）の入居が始まり、団地から豊中文化幼稚園に通う園児が増えました。通園バスの無い時代、遠距離を徒歩通園する園児の体力や健康面、道路事情の危険に対する杞憂、または保護者や住民の要望もあり、姉妹園として団地隣接の現在の地に昭和 38 年（1963）3 月、初代園長 松田ハルヲ（豊中文化幼稚園創設者）により開園しました。

2 学年 4 クラス 95 名から始まり、東豊中町の歴史とともに、また地域の皆様に支えられ平成 25 年（2013）創立 50 周年を迎えました。

平成 31 年（2019）には、3 学年 13 クラス 364 名の園児が通い、巣立った卒園児も 6,599 名を数えるまでになりました。



＜広教寺＞

浄土真宗本願寺派 祝松山広教寺

往昔、当時は摂津国東成玉造石山城の南、高津に建立された天台宗の寺院として、寺号を「順慶寺」といいました。寛永11年（1634）、朝廷より「祝松殿」の称号を賜る際、これまでの順慶寺を改め、山号を「祝松山」、寺号が「広教寺」としました。その時の堂々たる寺観を「摂津名所図絵」に記されています。

昭和20年（1945）3月14日の大阪大空襲の戦火に、幾多の寺宝と共に伽藍施設は悉く烏有に帰し、戦後の混乱期には寺領僅か130余坪へと狭められ寺院存亡危機へと立たされました。昭和36年（1961）10月、大阪市区画整理事業を機に寺域を現在の東豊中町に移しました。現在、戦火をくぐり抜け当寺に伝わる寺宝には、本尊「阿弥陀如来像」（伝聖徳太子作/青蓮院尊純法親王御念持仏）、「見真大師坐像」（伝親鸞作）、「六字尊号」（蓮如上人親筆）などがあります。「広教寺のしおり」参考



広教寺

＜正楽寺＞

東豊中町1丁目にある 威徳山 正楽寺



＜市道 上野新田線＞

東豊台地域を東西に走り、スーパーマーケットや店舗が多数並んでいるところです。



4 関連事項（※1～15）

※1 須恵器

須恵器の生産は、5世紀頃から生産を始め、6世紀前半に最も盛行し、7世紀に衰退したといわれます。大阪南部の泉北丘陵に多くの窯が営まれ、わずかに遅れて千里丘陵の千里川や天竺川水系に多くの窯が築かれ、泉北での生産を補うように須恵器の生産が始まります。桜井谷窯跡群として、豊中市内に30基以上の窯跡が確認されています。

大阪の泉北と千里の丘陵には、窯を築くために必要な河岸段丘の斜面、焼き物の素材となる大阪層群の粘土、燃料の薪となる森林、製品を運ぶための水路としての河川が非常に似かよった環境で存在したため、日本初めての陶器生産をリードすることになりました。豊中から全国に須恵器を出荷していたなんて、今ではなかなか想像できません。

須恵器は、古代中国の灰陶^{かいとう}に起源するものですが、わが国へは5世紀の初め頃に朝鮮半島から伝わった技術で、窖窯^{あながま}という半地下式の窯に焼き物を封じ込めて焼く日本陶器の源流です。野焼きで作る縄文や弥生時代の土器と比べて硬質の陶器で、のちに地上式になった窯を登り窯^{のぼりがま}と呼ぶようになり、瀬戸、常滑、越前、信楽、丹波、備前の六古窯に今も残る古式の登り窯につながっていきます。

※2 万葉歌碑

「玉かつま 島熊山の 夕暮れに ひとりか君が 山路こゆらん」(読人知らず)

丹波方面へ旅立った夫の行路をしのんで、留守居の妻が詠んだものだと 言われています。(この万葉歌碑は、豊中不動尊境内に建てられています)

※3 熊野田村

熊野田村は、現在の町名で東豊中町や熊野町の他、緑丘、上野東、上野西、新千里南町、東泉丘、西泉丘、旭丘、赤阪、栗ヶ丘町、夕日丘、中桜塚、広田町にあたり現在の豊中市域の村の中で最も広い村域です。

小字名に「坂」や「谷」という文字が多く見ら

れます。熊野田村から他所に出向く時は「坂道」を使うことが多く、現在も「宮の坂^{みやんざか}」「車坂」「宿の坂」など「坂」の名が残っています。

【勝尾寺街道】

熊野田村の道といえば、村を東西に通っている「勝尾寺街道」があります。豊中市教育委員会発行『文化財ニュースNo.37』（2013年）に「勝尾寺街道」のことが、次のように記載されています。

『大阪府誌』第4編（大阪府、1903年）によりますと、「豊中村大字新免で能勢街道から分岐、熊野田・新田・萱野・豊川・清溪^{きよたに}・止々呂美の各村を経て、東能勢村大字川尻で余野街道に合流する道筋で全長7里2町（約28km）」と記されています。

では、勝尾寺街道はいつ頃から存在していたのでしょうか。寛文10年（1670）桜井谷・熊野田村山論裁許絵図を見ると伊丹方面から来た道が新免村の南で能勢街道と交差し熊野田村を経て、天竺川に沿って進む道があります。これが勝尾寺街道にあたると推定できることから、おそらく17世紀後半までに成立していたと考えられます。勝尾寺街道という街道名と道筋が定められたのは、明治時代後半の道路整備によります。

旧新免・桜塚・熊野田村付近では、勝尾寺街道が伊丹方面から上新田村を経て京都を結ぶ道と認識されていたと考えられます。むしろ勝尾寺参詣には、箕面街道の方が近道で、それを利用したそうです。

【愛の渇き】

熊野田村は小説にも描かれています。昭和25年（1950）発行の三島由紀夫の『愛の渇き』という作品の舞台になっているのが旭丘（熊野田村）。この中で熊野田村は「米殿村」、天竺川は「小川」として登場しています。三島由紀夫の叔母（江村重子さん）の家が農園で、今の旭丘にありました。

【文化財】

ぶつげんじ 仏眼寺

- ・梵鐘（市指定有形文化財）

天明 6 年（1786）に造られたもので、
「摂津州豊嶋郡熊野田村^{ゆうじざん}熊耳山仏眼禅寺」と銘
があります。



仏眼寺 梵鐘

宝珠寺

- ・三重宝篋印塔（国指定重要美術品/旧法）
南北朝時代に造られたもので、花山法皇御塔、
仏眼上人塔の石造二基があります。
- ・金銅観世音菩薩立像（市指定有形文化財）
飛鳥様式の市域最古の金銅仏で、飛鳥後期の
ものといわれています。
- ・木造彩色聖観音菩薩立像（市指定有形文化財）
平安時代後期のもので、宝珠寺の本尊

八坂神社

八坂神社は、天正 6 年（1578）、伊丹の荒
木村重の兵戦によって社殿は破壊され、記録を
はじめほとんどが散逸し神社の領地もなくな
りました。長らく仮の社殿でしたが、江戸時代
の慶安 2 年（1649）に現在の場所に再建さ
れました。明治 3 年（1870）に「葛上^{くまがみしんじ}神祠」
から「八坂神社」に改称しました。



宝珠寺 三重宝篋印塔

- ・台額 4 基（市指定有形文化財）

高さ 5m、重量 500kg の格調のある行燈で、
熊野田村の東西南北の氏子地区に各 1 基
（計 4 基）があり、秋季祭礼には各地区より
担ぎ出し境内を練りまわります。天保 14 年
（1843）の西地区のものが最も古く、次いで
北地区の弘化 2 年（1845）。東・南の年代は
不明ですが年代は近いものと思われます。



台 額

写真提供 三浦 大氏

- ・八坂神社獅子神事祭り（市指定無形文化財）
秋祭りの獅子神事の舞、獅子頭は牛頭天王（祭神）を具現化したもので「おてんさん」「おてんのうさん」とよばれています。年代は未詳ですが、安永8年（1779）9月に補修したとあります。五穀豊穰と家内安全・無病息災を祈って行われています。

- ・鳥居

延宝8年（1680）に建立され、豊中市では最古の鳥居でしたが、平成7年（1995）の阪神大震災で倒壊し現在の鳥居は、その後に建立されたものです。

【産物】

産物は元文元年（1736）の『豊嶋郡誌』（今西家文書）には、「門松 熊野田村ノ辺ヨリ伐り出ス、正月二府内二鬻ク」とあり、江戸時代中期には、筍や門松を大坂天満市場に出荷していました。筍生産は桜井谷と並んで有名で、村には市が2カ所あり、大正10年（1921）には缶詰工場が5カ所ありました。昭和4年（1929）からは輸出もされるようになりました。植木栽培も盛んで、松・紅葉・椿・榎・泰山木が大阪市内にも送り出されました。

農産物としては、大正から昭和初期にかけてイチジク、ビワ、しいたけ、キヌサヤエンドウが多くとれ、特に桃が多く6月には桃の市が開かれたそうです。

※4 垂水西牧

摂関家領の私牧から発展した荘園で、成立当初は島下郡を荘域とする垂水東牧と合わせて垂水牧と呼ばれましたが、11世紀半ばまでに東西に分かれました。東牧は藤原忠実の時に奈良春日社に寄進され、西牧も寿永2年（1183）近衛基通によって同じく春日社に寄進されています。

垂水西牧はさらに奈良の南郷方が管轄する桜井郷・江坂郷と同北郷方が管轄する萱野郷・六車郷（原田郷）に分かれ、南郷目代には鎌倉時代末に今西氏が派遣されました。この土地は戦国時代まで春日社領として続きます。

荘域は、現在の豊中市域の大半に及びます。



獅子神事祭り

写真提供 三浦 大氏



八坂神社 本殿

写真提供 三浦 大氏

※5 熊田氏及び中川清秀

春日社若宮神主家の日記「中臣祐春記」の正和2年（1313）6月27日条に、「熊田庄住人切七郎」という人物が熊野田にいたことを記しています。

熊野田は春日社領垂水西牧の「牧内」にあたるので、牧内の一部分が熊野田と呼ばれていました。

永禄年間（1558～1569）に熊田資利の娘（梢）が、戦国武将、中川清秀に嫁いで以降、熊田氏は中川家の家老として活躍します。天正11年（1583）の史料では熊野田千介として1500石が知行されています。後、熊田氏は中川清秀の二男（秀成）と共に、播磨国三木に転封。その後、豊前国岡藩に移住しました。

【中川清秀（幼名:虎之助、通称:瀬兵衛）】

戦国時代から安土桃山時代の武将。摂津国福井村中河原(現 茨木市)に生まれ、はじめ池田城主、池田勝久に従い、その後荒木村重、織田信長、豊臣秀吉に仕え、摂津茨木城主となります。

天正11年(1583)豊臣秀吉と柴田勝家が戦った賤ヶ岳の戦いで戦死42歳。家督は長男秀政が継ぎますが、弟秀成は豊前国岡藩初代藩主となり幕末まで藩主として続きます。

キリシタン大名の高槻城主、高山右近とは従兄弟にあたるといわれています。

『中川氏御年譜』第一 中川清秀 条
永禄元年(1558)

永禄年中、摂州熊野田ノ御代官熊野田隠岐守
資利ノ女(むすめ)ヲ娶ラセ給
フ、其後隠岐守力嫡子千助資勝御幕下二属
シ...略

『竹田市教育委員会編』平成19年(2007)

※6 検地・小物成山

太閤検地は、豊臣秀吉が全国統一基準で行われた土地調査で、土地一筆ごとに土地の種別・等級・面積・分米・名請人を確定します。これにより、近世の土地制度である石高制が成立しました。

村域画定作業を「村切り」といいますが、この時に熊野田村村域が画定されました。荘園であった春日社領は、太閤検地と江戸幕府の成立により解体されます。

小物成とは、本年貢に対し山年貢ともいいます。具体的には田畑肥料や家畜の飼料となる下草、燃料となる薪・芝などへの課役のことです。

※7 蒔田氏

江戸時代の熊野田村は、將軍の直臣である旗本の蒔田^{まいた}氏の領地でした。蒔田広定は、もとは尾張国(愛知県)の武士で豊臣秀頼に仕える1万石の大名でした。慶長5年(1600)関ヶ原合戦で西軍についたため高野山に蟄居しましたが、浅野幸長(長政の子)の尽力で許され家康に仕え、備中国賀陽・窪屋・浅口郡、河内国大泉郡、山城国久世郡、摂津国豊嶋郡(熊野田領)・八部郡の1万石の大名となりました。

寛永13年(1636)広定死去後、長男の定正が遺領を継ぎます。定正は弟長広に3000石(熊野田村含む)を分与し熊野田村(450石余)は長広が継ぎますが、この時、兄弟両家ともに1万石以下の旗本となりました。

熊野田村は、長広の子孫が継承し明治維新まで続きます。

熊野田村御仕置之儀申達覚
(熊野田村負田家文書)

一、熊野田村御屋形屋敷の儀、従先規地頭城山
之分、不残
権現様より前権佐様御拝領被遊...(中略)…
只今之観音堂は前地頭城内之持仏堂二
候...(中略)…

『文化財ニュース豊中No.29』

御屋形屋敷は、前から地頭の城山であったとされています。「地頭」とは、江戸時代には領主一般のことを指しており、広定が江戸幕府によって支配が認められる以前から、熊野田には領主の城山があったことがわかります。

「只今の観音堂は前の地頭城内の持仏堂」であったと記されています。「観音堂」とは宝珠寺の前身を指すと考えられますので現在、宝珠寺がある丘が城山であったこととなります。

※「前の地頭」とは、熊田氏のことです

※8 山論・水論

【山論】

落ち葉・枯れ草などの肥料、燃料用の薪炭、牛馬の飼料、建築土木の用材などのために、村にはどうしても山が必要でした。このために山の用益権は個人に認められず、村単位に区分されました。こうした性格をもつ山を^{いりあいやま}入会山と呼び、入会山にはその用益をめぐって村々の間に厳しい規則があって、勝手な入山や伐採・採集は固く禁じられ、犯した場合には厳しい制裁が加えられました。

千里山丘陵は、周辺の入会山でしたが、近世初頭にはそれら村々間での用益権をめぐって、しばしば争論が起こっています。

兎川沿いの新田開発にともなって生じた村々の境界線争いもあったようです。

北部の山林をもつ桜井谷の村と熊野田村に対し、南部の山林の少ない村々が争った山論があります。特徴的なものとしては、「慶長・元和の争い」といわれるもので、慶長 2 年（1597）・慶長 7 年（1602）と元和 6 年（1620）に桜井谷村 6 カ村と原田郷・新免村が争った山論があります。宝暦年間（1751～64）にも 29 カ村を巻き込んだ千里山小物成請地に関する大争論が起きています。

【水論】

農業生産を決定づける水の問題は、限られた水の利用をするためや、旱魃や洪水の時を契機として激しい紛争をまき起こしました。そのため豊中の丘陵・台地には溜め池がたくさん造られています。

用水の利用では下流よりも上流の村々が有利な立場に立ちますが、悪水抜きの時ではこれと逆になります。このような権利は「水利権」として現在も残っています。山論や水論の処理は享保 7 年（1722）までは京都町奉行所が行っていましたが、以後は大坂町奉行所の管轄になりました。

熊野田村との境界付近、長興寺皿池の東辺りで天竺川がよく切れました。大水の際には長興寺村の田んぼが水に浸かってしまうので、寛文 3 年（1663）長興寺村の村人は、境界のすぐ南側に

一夜のうちに、皿池から天竺川までの堤を築きました。その後この堤を誰いうことなく「一夜堤」や「横堤」と呼ぶようになりました。一説には長興寺村領主保科弾正忠が、その勢威を誇示するため 3000 人の人を集めて一夜に堤を築いたものといわれています。現在、この堤の北側の湿田は埋め立てられて夕日丘住宅地になっており、中央部に、その痕跡をとどめています。

また、文化 5 年（1808）には、村域の南を長興寺と接する五郎谷（皿池から服部霊園の管理事務所付近、広田町）で、熊野田村の伏樋と長興寺村の南堤の修理樋を折半して解決したこともありました。

※9 延宝検地

太閤検地から 80 余年が経った延宝 5・6 年（1677・1678）に、天領の畿内一円に丹波・播磨を加え、統一した検地条目（6 尺 3 寸を 1 間とした竿を 6 尺 1 寸に縮める）によって、幕府による延宝検地が行われました。必ずしも改出しを摘発するといったものでなく、太閤検地以後の村の発達を具体的に調べて、その現実に即した貢租を収取しようとしたものでした。

熊野田村の延宝検地は、尼崎藩の青山大膳亮が担当しています。延宝検地に関連して延宝 5 年（1677）以来、熊野田村百姓一統が連判して文禄検地帳の使用を要求して領主に従わず、江戸越訴を行い 12 年にわたり訴訟を続けました。結果 3 人が死罪、村の半数近い人が追放されました。

※10 箕面有馬電気軌道

開業時は駅の設置も服部天神・岡町など沿線の神社・仏閣・公園・温泉・梅林を対象としたものが大半で「観光遊覧電車」としての性格が強うかがえました。

『野畑の歴史』（松尾 止氏著）によりますと、箕面有馬電気軌道（現 阪急電鉄）が、梅田～有馬間の電車を走らせる計画を立案し、取り敢えず梅田から十三、三国、服部（服部天神）、岡町（原田神社）に駅を設置し、現在の豊中駅から桜井谷村中央部、柴原～内田～少路～野畑～牧落～西小路～桜～箕

面と軌道を敷設する計画を示した。しかし村民は「役牛が驚き農耕に支障をきたす」とか「青少年が便利になれば非行に走る」とかの理由を申し立て、反対運動を実施したため、電車路線は桜井谷を迂回し、麻田村(蚩ヶ池)に計画変更したそうです。また熊野田小学校 100 周年記念誌「くまのだ」にも、「はじめの計画では、大阪からまっすぐ熊野田を通して箕面へ行くはずであったのが、今のように変わったそうです」と記載されています。

『京阪神急行電鉄五十年誌』の「企業目論見書」には、「本鉄道は大阪府大阪市北区曽根崎中 1 丁目に起り…略…同府西成郡中津村大字下三番に至り、同所より能勢街道を北進して新淀川を渡り、服部天神前及岡町を経て豊能郡北豊嶋村大字井口堂に至り、東北に進み、箕面村大字半町より同村大字牧落までは国道により、更に北向して同村大字平尾(箕面公園)に至り、西方に湾曲し、同村秦野村大字上洪谷、同村尊鉢を経て前記井口堂に復帰する循環線とし、更に同所より同郡池田町の南端を通過し…略…」と書いてあり、現在の線路とは違っていますがいろんな案があったのでしょうか。

この頃の電車は、82 人乗りの小型の電車で、腰掛けが狭く走るとビリビリと頭にひびいたということです。創業者の小林一三氏の経営理念は、お客様優先で一三が電車に乗った時は絶対座らなかったといい社員にも徹底したそうです。

電車乗り入れによって、大阪市の工業的発達も加わり「空気のきれいな静かな住宅地」に住まいを求める人々が増え、電鉄会社はもちろん住宅会社が市域の宅地や住宅売り出しの宣伝につとめました。このような状況の中、当初は、電車も 1 両で走っていましたが、豊中市内のあちこちに住宅が開発されはじめた、大正 11 年(1922)になってから 2 両編成になりました。

箕面有馬電気軌道は、大正 7 年(1918)に「阪神急行電鉄」に、昭和 18 年(1943)には「京阪神急行電鉄」、昭和 48 年(1973)に「阪急電鉄」と社名変更をしています。

※11 国登録有形文化財

住宅開発された当時に建てられた住宅が、今では貴重な国民的財産として国の登録有形文化財となっている住宅もあります。

M家は、建設当時の木造 2 階建洋瓦葺切妻屋根、外壁ドイツ壁を残し、平面形式は、室内部での通り抜けを解消した中廊下型。U家は、ステンドグラスやタイル張りの暖炉が残り、外観は洋風板貼、他は杉皮貼などがあります。



M家 木造 2 階建洋瓦葺切妻屋根

※12 乗合バス

現豊中市域における最初のバス交通は、昭和 2 年(1927)、民間の豊中乗合自動車会社が、豊中駅と府立豊中中学校(現 府立豊中高校)間を結んだもので、バスの 10 人乗り 1 両、5 人乗り 3 両と小規模の会社でした。乗客の大部分が豊中中学と梅花高等女学校(現 梅花中学・高校)の生徒や職員でした。2 年後に阪急系の阪神合同バスに統合。

戦時中には、バスは石油が少なく制限されていたこともあって、木炭バスが車の後ろから白い煙を吐きながら走っていたそうです。



昭和 2 年頃の豊中乗合自動車会社バス

写真提供 豊中市文書館

※13 水道施設

昭和8年(1933)に開発された東豊中住宅地は、豊中町水道の浄水を低地で受水しポンプで配水池に送水して自然流下で給配水する施設をもっていました。給水人口約500人を対象とした専用水道で、現行の水道法の規定からすると「簡易水道」の範囲となります。

東豊中住宅地は島熊山の山腹から三ツ池にかけた森林であるため起伏が多く、頂上部に配水池を設けて飲料水の供給を行っていました。この配水池は現存しませんが、後に東豊中配水池(現在は使用していません)となりました。この専用水道は昭和11年(1936)の拡張事業に際し豊中市へ譲渡され、その際施設も整備されました。

第1水源地(現 豊中市上下水道局庁舎)から豊中高校付近まで内径6吋管(150mm)を敷設、さらに東豊中住宅地へも内径4吋管(100mm)を住宅の人口である三ツ池まで敷設、水源池加圧ポンプによる増圧水は三ツ池に設けた浄水槽で貯水し、加圧ポンプにより最頂部に設けた浄水池へ圧送した後、自然流下、配水したものです。

熊野田村では、昭和9年(1934)頃、周辺の住宅開発が活発したこともあって、飲用と灌漑用の水確保の検討を開始しました。村内の清水池(清水池は熊野田を古くから知る人によりますと、池名の通り清い水が湧き出ていたといいます)に水源地を設け、水量が適当であれば建設に着手するというものでしたが、この矢先に「室戸台風」の襲来があり、そのため計画案を白紙に戻し、村直営を前提としつつ配水口径を敷設、豊中町から必要量の水道受水を確保することになったようです。

※14 水利・雨乞い

『聞き書き「水とくらし」研究紀要第94号』には、「三ツ池の水も、今の東豊中のバス停(池田銀行辺り)の所から、東豊台小学校のある辺り、小林病院辺りにあった田んぼを回って兎川に落ちていました」「東豊中小学校の運動場になっている所に西谷池という溜池がありました。この水は東豊中第1団地から熊野町4丁目にかけてあった水田を養ったあと仏眼寺辺りから兎川に落ちていまし

た」等と記載され、三ツ池や西谷池の水が農業に利用されていることがわかります。

雨が降らない旱魃の時などは、熊野田村でも「雨ごい」行事がありました。

熊野田小学校創立100年誌『くまのだ』には、「雨ごいに、琵琶湖の竹生島から火をいただいてきて、西谷の上の仏念寺山をねりあるき、上の池のから底に、かがり火をたいて七日七晩カネや太鼓をたたいておがみました」と書かれています。

また、八坂神社に舞台をつくり、カネや太鼓を鳴らし、やぐらを立て、その上にダンゴをつけて2週間程祈ったことを、幼い頃のことを記憶されておられる方もおられました。

※15 寺子屋・大池小学校

江戸時代には、寺子屋といって今の学校と違って先生が自分で子ども達を集めて勉強を教えていた塾のようなものがありました。

熊野田村では、明治元年(1868)から明治6年(1873)まで、佐分利四平さんが、読み・書き・そろばんなどを教えていました。明治7年(1874)に豊嶋郡第2区二番小学が仏眼寺の観音堂を仮校舎として設立されます。現在の熊野田小学校です。

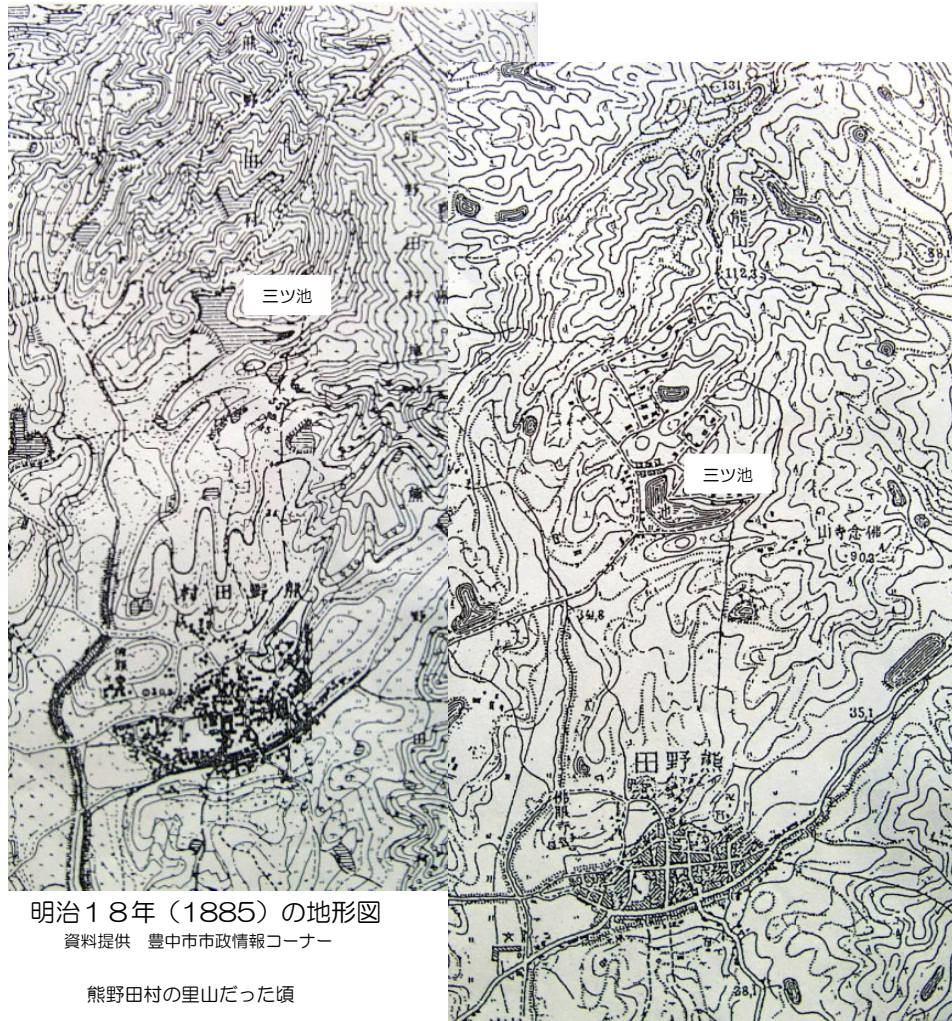
東豊中住宅地を開発した時に、子ども達の通学する小学校は熊野田尋常小学校でしたが、郷土史家の鹿島友治氏の著作『明治・大正・昭和の豊中ふるさと』の想い出』には、「住宅地の移住者は大阪市内に職場をもつサラリーマンであり知識階級であった。彼らはその子女の教育に熱心のあまり、その村の小学校に入学させず、年額50円の負担金を支払ってまで豊中の小学校に越境入学をさせていたのである。合併になれば、当然負担金は不要となり、かつまた住民パワーによって、その住宅は自由校区となって、旧来の実績通り旧豊中町の小学校に通学できると考えたはずである。事実市制施行後は全くその通りになった。たとえば熊野田村地域の上野・東豊中の児童たちは大挙バスに乗って大池国民学校に通学しました」と書かれているように越境入学もあったようです。

5 変 遷



熊野田村小字名	現在の東豊台地域
奥滝谷（おくたきだに）	深谷池周辺以北・島熊山
滝谷（たきだに）	グランドメゾン東豊中付近
四十町（しじゅうまち）	千里青雲高等学校（一部が東豊台地域に含む）
三ツ池（みついで）	三ツ池周辺
三ツ池下（みついでした）	兎川沿い（東豊中橋より北側）
大芝（おおしば）	東豊中橋付近
茨谷（いばらだに）	東豊中幼稚園・マルヤス付近
北高町（きたたかまち）	コープ・ハイツ三ツ池台付近・シャレール東豊中
風呂ヶ谷（ふうろがだに）・中ノ木（なのき）	シャレール東豊中付近
高町（たかまち）	豊中市立東豊台小学校付近
惣田（そうだ）	東豊台自治会・ライオンズM・セントラルM・豊中ハウス付近
口西谷（くにしだに）・北稲葉（きたいなば）	シャレール東豊中から南側（一部が東豊台）

地形図に見る



昭和25年(1950)の地形図
「地理調査所」作成 昭和25年 25000分の1地形図を利用

昭和8年(1933)東豊中住宅が三ツ池を中心に
開発され、里山が住宅地になる

東豊台の移り変わり



昭和36年(1961)の地形図
資料提供 豊中市市政情報コーナー

昭和35年(1960)に東豊中団地(現 シャーレル
東豊中)が完成しますが、まだ緑も多く里山の風情を残
しています

令和4年(2022)の地形図
資料提供 豊中市市政情報コーナー

現在の東豊台

懐かしい



昭和30年代
東豊会館より西側、兎川の源流と思わ
れる東豊中町1丁目付近を写す
写真提供 佐野 勇氏

昭和30年代
中央環状線沿いレオ東豊
中付近より東豊中町を写す
遠くに東豊中団地の給水
塔が見えます
写真提供 佐野 勇氏



昭和40年代
東豊中町3～6丁目を写す
東豊中小学校や新千里南
町が見えます
写真提供 橋本 和正氏

東豊台

題字 金子 晴治氏



昭和32年頃
東豊中町6丁目(ライオンズマンション付近)
から熊野田方面を見る
写真提供 三浦 大氏



昭和32年頃
熊野田から東豊中町6丁目
(ライオンズマンション付近)を見る
写真提供 三浦 大氏



昭和49年頃
東豊中町3丁目
まだ自然が残っている
深谷池
写真提供 豊中市広報公聴課

昭和46年頃
東豊中町3丁目 三ツ池
現在、三ツ池付近は風致地区
に指定されている
写真提供 豊中市広報公聴課





昭和40年頃
東豊台小学校の建設用地
写真提供 三浦 大氏



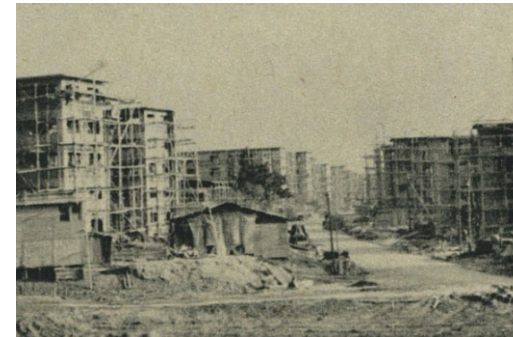
昭和52年頃
東豊台小学校の全容
写真提供 豊中市教育センター



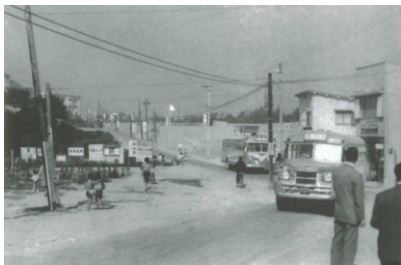
昭和32年頃
東豊中町6丁目(現 シャーレル東豊中)
遠くに「どんぐり山」が見えます
写真提供 三浦 大氏



昭和50年代
豊中トップセンター(現コープ駐
車場)とコープ
写真提供 豊中市教育センター



昭和34年頃
東豊中第1団地(現シャーレル東豊中)の建設
写真提供 豊中市広報公聴課



昭和30年代
東豊中団地前バス停付近から
上野小学校方面を見る
写真提供 豊中市広報公聴課



昭和41年
東豊中団地前バス停付近から
シャーレル東豊中方面を見る
写真提供 豊中市広報公聴課



昭和50年代
東豊台小学校の南方より
東豊中第1団地を見る
写真提供 豊中市教育センター

東豊台百年

ニュース

箕面有馬電気軌道（現 阪急電鉄）開業 1910
（梅田～宝塚間 石橋～箕面間）

関東大震災 1923

豊中市域で最初のバス路線営業 1927
豊中駅から豊中中学校（現 府立豊中高校）



写真提供 豊中市

東海道新幹線 開業 1964

東京オリンピック 開催 1964

市道神崎刀根山線 整備される 1964

日本万国博覧会 開催 1970

北大阪急行電鉄 開業 1970
（千里中央～江坂間）

冬季オリンピック（札幌大会）
開催 1972



写真提供 豊中市



写真提供 豊中市

大阪モノレール 開業 1994
（千里中央～柴原間）

阪神淡路大震災 1995

冬季オリンピック（長野大会）開催 1998

東日本大震災 2011

1910年

1950年代

1960年代

1970年代

1980年代

1990年代

2000年代

東豊中町が正式に住所表記となる
1956

東豊中住宅 開発 1933
（バス路線が東豊中住宅地まで延長）

菟川堤防に「さくら」植樹 1936



写真提供 豊中市

第十一中学校 創立
1973

東豊台小学校 創立
1974

東豊台公民分館 設立
1976

第十五中学校 創立
1979

東豊中団地 入居始まる 1960

広教寺 大阪市内から
東豊中町に移転 1961

東豊中幼稚園 開園 1963

東豊台小学校
ミニバスケット大阪府大会 優勝
（全国大会出場）1987・1989・
1990
ミニバスケット大阪府大会 準優勝
（近畿大会出場）1988

第1回東豊台まつり 開催
1989（コープ前バス通り）

東豊中第1団地 建替工事始まる 2003

第16回東豊台まつり 小学校で開催 2004

第1回東豊台コンサート 開催 2008

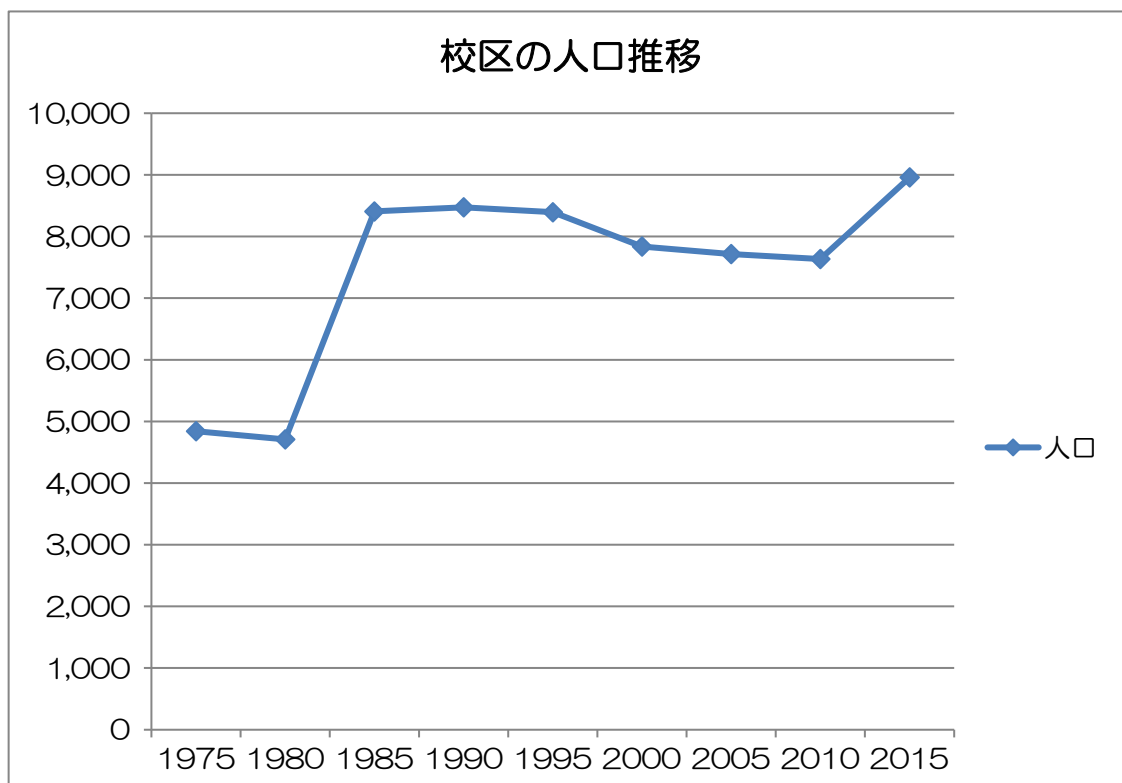
東豊台小学校 創立40周年 2014

東豊台公民分館 創立40周年記念誌 編集 2015

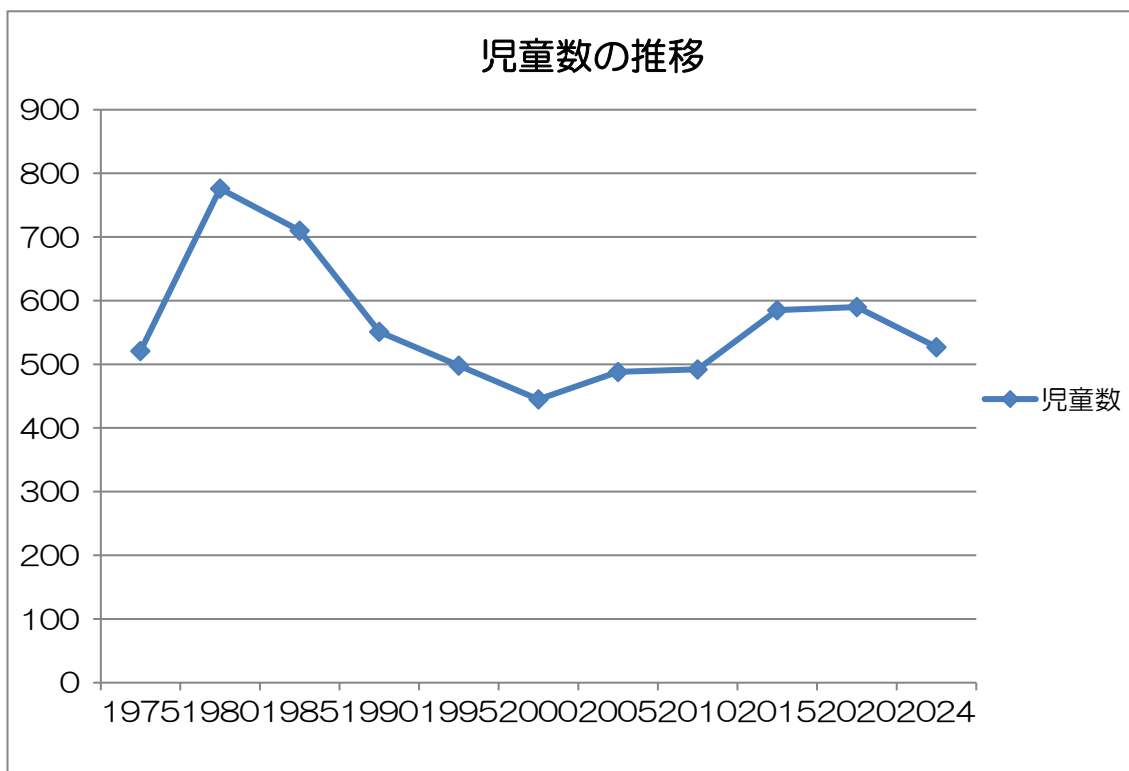


東豊台

校区の人口及び児童数の推移



(国勢調査より)



(とよなか教育要覧より)

東豊台地域年表

新修豊中市史等参考

西 暦	和 暦	東 豊 台 関 連 事 項	事 柄
		<p>〈先 史〉</p> <p>1500 年位前</p> <p>上野小学校前、青池付近で須恵器を生産</p> <p>東豊中窯跡(東豊中町 4 丁目)で須恵器を生産</p>	
		<p>〈古 代〉</p>	
645	大化元		大化改新（諸説あり）
701	大宝元	大宝律令を施行し全国を国・郡・里に分ける (豊中市域の大部分は摂津職豊嶋郡に所属)	大宝律令
710	和銅 3		平城京に遷都
717	養老元	国・郡・郷・里制を採用	
793	延暦 12	摂津職を摂津国(七郡)に改編 (豊嶋・能勢・島上・島下・西成・東成・住吉)	
794	延暦 13		平安京に遷都
931	承平年間	豊嶋郡に七郷が所属(和名類聚抄より)	
938		(秦上・秦下・駅家・豊嶋・余戸・桑津・大明)	
987	寛和 2	花山法皇、僧仏眼と熊野田を行幸(伝承)	
		<p>〈中 世〉</p>	
1183	寿永 2	藤原摂関家が垂水西牧を春日社に寄進	
1185	文治元		鎌倉幕府（諸説あり）
1221	承久 3		承久の変
1313	正和 2	熊田庄住人切七郎(中臣祐春記)の名が登場	
1336	建武 3		室町幕府
1401	応永 8	熊野田村名の初見。春日社領垂水西牧田数帳 (今西家文書)に「熊野田村 拾町公田定」	
1467	応仁元		応仁の乱
		<p>〈近 世〉</p>	
1594	文禄 3	熊野田村が太閤検地	
1600	慶長 5		関ヶ原の合戦
1601	慶長 6	熊野田村と原田郷・新免村・長興寺村間で山論	
1603	慶長 8		江戸幕府
1605	慶長 10	「摂津国絵図」に熊野田村	

西 暦	和 暦	東 豊 台 関 連 事 項	事 柄
1617	元和 3	蒔田広定が熊野田村を領す	ペリー浦賀来航 大政奉還
1636	寛永 13	蒔田長広が継いで熊野田村を領す	
1663	寛文 3	熊野田村と長興寺村の間で水論(一夜堤)	
1669	寛文 9	兎川の上流で熊野田村と桜井谷六カ村の山論	
1678	延宝 6	熊野田村にて延宝検地	
1681	延宝 9	熊野田村九右衛門一族が江戸越訴を行う	
1758	宝暦 8	千里山小物成山請地問題が発生	
1853	嘉永 6		
1867	慶応 3		
＜近 代＞ 【明 治】			
1868	明治元		鳥羽伏見の戦い
1869	明治 2	熊野田村、大阪府の管轄となる	版籍奉還 旗本領廃止 廃藩置県
1871	明治 4		
1874	明治 7	豊嶋郡第 2 区二番小学(現 熊野田小学校)創立 (仏眼寺観音堂)	
1877	明治 10		西南戦争
1889	明治 22	町村制施行(熊野田村が正式村名となる)	大日本帝国憲法発布
1892	明治 25	豊南高等小学校開校(現 大曽公園)	
1894	明治 27		日清戦争
1896	明治 29	豊嶋郡と能勢郡が合併し豊能郡となる	
1904	明治 37	豊南高等小学校、岡町に移転	日露戦争
1910	明治 43	箕面有馬電気軌道開業(現 阪急電鉄) 梅田～宝塚(24.9km)、石橋～箕面間 (4 km)	
【大 正】			
1914	大正 3		第一次世界大戦
1915	大正 4	この頃から、熊野田村に電灯がつきはじめる	第 1 回中等野球大会 (豊中運動場)
1922	大正 11	府立豊中中学校開校(現 豊中高校)	
1923	大正 12		関東大震災
1925	大正 14		ラジオ放送開始
1926	大正 15	梅花高等女学校(現 梅花中学・高校)・同女子専門学校 が大阪市東淀川区(現 北区)から移転	
【昭 和】			
1927	昭和 2	現豊中市域で最初のバス路線開業 (豊中停留所～豊中中学校間)	世界金融恐慌
1931	昭和 6		満州事変
1932	昭和 7		5・15 事件

西 暦	和 暦	東 豊 台 関 連 事 項	事 柄
		<p>〈東豊台はじまる〉</p> <p>東豊中住宅開発 (バス路線を東豊中住宅地まで延長)</p> <p>大阪池田線(産業道路、現 国道 176 号線)開通</p>	国際連盟脱退
1933	昭和 8		
1934	昭和 9	室戸台風、熊野田尋常小学校校舎倒壊、死傷者出る	室戸台風
1936	昭和 11	豊中市成立(豊中町、麻田村、桜井谷村、熊野田村) 兔川堤防に、豊中市成立記念として桜を植える	2・26 事件 職業野球始まる (プロ野球)
1941	昭和 16		太平洋戦争始まる
1945	昭和 20	豊中市域空襲	太平洋戦争終戦
1947	昭和 22	中豊嶋村・南豊嶋村・小曽根村が豊中市に編入 豊中市立第三中学校創立	日本国憲法施行 6・3 制始まる
1949	昭和 24	上野小学校開校	湯川秀樹氏ノーベル賞
1950	昭和 25		朝鮮戦争
1951	昭和 26	阪急バス、梅田～東豊中間系統新設	
1952	昭和 27		サンフランシスコ平和 条約発効
1953	昭和 28	阪急バスが熊野田に入る (豊中及び曽根を結ぶ路線を開設) 島下郡新田村大字上新田が豊中市に編入	テレビ放送開始
1955	昭和 30	庄内町が豊中市と合併(現市域となる)	日本住宅公団発足
1956	昭和 31	東豊台地域の住所が東豊中町となる	国際連合加盟
1958	昭和 33	旭ヶ丘団地入居開始	東京タワー完成 ロカビリー旋風 フラフープ流行
1959	昭和 34	東豊中団地建設工事着工	伊勢湾台風
1960	昭和 35	東豊中団地入居開始 東豊中団地にスーパー「セントラル」開業 阪急バス、豊中～東豊中団地前間を増便	日米安保条約
1961	昭和 36	広教寺が大阪市内より移転	千里ニュータウン起工
1962	昭和 37	豊中トップセンター開業	
1963	昭和 38	東豊中団地「観光バスショッピング」始まる 東豊中団地、旭ヶ丘団地などで断水騒動 東豊中幼稚園開園	名神高速道路開業 (栗東～尼崎間)
1964	昭和 39	市道(神崎刀根山線)が整備される マチカネワ二、大阪大学豊中キャンパスで発見	東海道新幹線開業 東京五輪
1966	昭和 41		中国、文化大革命 ビートルズ来日

西 暦	和 暦	東 豊 台 関 連 事 項	事 柄
1967	昭和 42	東豊中第2団地入居開始 東豊中小学校開校 ゆたか幼稚園(現 こども園)開園 東豊中保育所(現 こども園)開園 阪急バス、東豊中小学校前～曽根東間系統新設	3 億円事件 日本万国博覧会
1968	昭和 43	東豊中団地、一般加入電話(自動電話)に切り替え	
1970	昭和 45	北大阪急行電鉄、江坂～万国博中央口間で開業 (千里中央～万国博中央口間は万博終了後廃止)	
1971	昭和 46	東豊中団地「なかよし文庫」図書館大会で発表	
1972	昭和 47	ダイエー曽根店との間で無料買物バス運行	札幌五輪(冬季) 浅間山荘事件 山陽新幹線開業 (新大阪～岡山間) 沖縄、日本に復帰 日中国交正常化 オイルショック
1973	昭和 48	豊中市立第十一中学校創立	ローソン 1 号店、 南桜塚に開店
1974	昭和 49	東豊台小学校創立・初代校長 須賀 浩氏	
1975	昭和 50		
1976	昭和 51	東豊台小学校校区変更 (東豊中町 1・2・4 丁目の一部が校区に入る) 東豊台公民分館設立。初代分館長、政岡喜弘氏	
1978	昭和 53	公民分館 第 2 代分館長、峰岸暁美氏	大学入試共通一次試験 専売公社・電電公社 民営化 日航ジャンボ機墜落
1979	昭和 54	豊中市立第十五中学校創立	
1984	昭和 59	公民分館 第 3 代分館長、真砂洋輔氏	
1985	昭和 60	公民分館創立 10 周年記念式典	
1986	昭和 61	東豊台公民分館章決定 	国鉄分割民営化 青函トンネル開通 瀬戸大橋開通
1987	昭和 62	小学校Mバスケットボールクラブ全国大会出場	
1988	昭和 63		

西 暦	和 暦	東 豊 台 関 連 事 項	事 柄
		【平 成】	
1989	平成元	小学校Mバスケットボールクラブ全国大会出場 第 1 回「東豊台まつり」コープ前バス通りで開催	消費税 3%導入
1990	平成 2	小学校Mバスケットボールクラブ全国大会出場	スギ花粉予報開始
1991	平成 3	公民分館 第 4 代分館長、峰岸暁美氏 熊野田遺跡発掘	
1992	平成 4	公民分館 第 5 代分館長、中島茂三氏	
1993	平成 5		Jリーグ開幕
1994	平成 6	公民分館 第 6 代分館長、上村 学氏 大阪モノレール柴原～千里中央間開業	関西国際空港開港
1995	平成 7	東豊台公民分館創立 20 周年記念式典 (消防フェア同時開催)・創立 20 周年記念誌	阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件
1997	平成 9		消費税 5%に
1998	平成 10		長野五輪(冬季)
2000	平成 12	公民分館 第 7 代分館長、矢野洋一氏	
2001	平成 13		米同時テロ
2002	平成 14		サッカーW杯日韓
2003	平成 15	東豊中第 1 団地建て替え始まる	
2004	平成 16	この年から「東豊台まつり」を東豊台小学校で開催 東豊中第 1 団地(シャレール東豊中)入居開始	
2005	平成 17	東豊台公民分館創立 30 周年記念式典 創立 30 周年記念誌	
2007	平成 19	第 1 回東豊台コンサート(第九)開催 第 1 回史跡ハイキング開催	郵政公社民営化
2008	平成 20	公民分館 第 8 代分館長、古八英之氏	リーマンショック
2009	平成 21		裁判員制度開始
2011	平成 23		東日本大震災 女子サッカーW杯優勝 (なでしこ J)
2012	平成 24	公民分館 第 9 代分館長、田井良三氏	東京スカイツリー竣工
2014	平成 26	公民分館 第 10 代分館長、古八英之氏	消費税 8%に 御嶽山噴火
2015	平成 27	分館創立 40 周年記念誌「古里のちから」編集	
2016	平成 28	公民分館 第 11 代分館長、服部一秀氏	
2019	令和元		消費税 10%に
2021	令和 3		東京五輪
2024	令和 6	公民分館 第 12 代分館長、藤澤啓子氏	
2025	令和 7	東豊台公民分館創立 50 周年記念式典 記念誌「古里のちから」データ化	北大阪急行電鉄 箕面萱野駅まで延伸 大阪・関西万国博覧会

冊子制作にあたり、次の機関、方々からご協力を頂きました。

大阪大学大学院文学研究科日本史研究室	豊中市立東豊台小学校
金子時治	豊中八坂神社
広教寺	橋本和正
佐野 勇	服部隆夫
清水喜美子	東豊中幼稚園
豊中市教育委員会事務局生涯学習課	仏眼寺
豊中市政策企画部広報広聴課	宝珠寺
豊中市総務部行政総務課豊中市文書館	三浦 大
豊中市総務部情報政策課市政情報コーナー	森井直勝

(順不同・敬称略)

参考文献

鹿島友治

写真集「明治・大正・昭和の豊中ふるさとの思い出」鹿島友治 1980

「豊中ありし日の景観」鹿島友治 1984

「豊中たすねある記」サンケイ新聞生活情報センター 1982

京阪神急行電鉄株式会社編

「京阪神急行電鉄五十年誌」京阪神急行電鉄 1959

小林 茂

「わが町の歴史」豊中 株式会社文一総合出版 昭和 54 年 (1979)

シャレール東豊中自治会「シャレール東豊中・くらしのガイド」平成 17 年 (2005)

竹田市教育委員会編 「中川氏御年譜」竹田市 平成 19 年 (2007)

田中功一 …小学校 120 周年記念によせて

～山・川・里～みんなのふるさと「熊野田(くまんだ)」平成 6 年 (1994)

鉄道省編 「全国乗合自動車総覧」(大阪府の部) 鉄道公論社 1935

豊中市教育委員会編 文化財ニュース豊中 豊中市教育委員会

No.16(平成 4 年(1992)) No.29(平成 13 年(2001)) No.37(平成 25 年(2013))

豊中市教育委員会社会教育課文化財保護係編

とよなか文化財ブックレット No.1「通史編」豊中市教育委員会 1992

豊中市史編纂委員会編 新修豊中市史 豊中市

通史 1 (2009) 通史 2 (2010) 自然編 (1999) 考古編 (2005)

民俗編 (2003) 社会経済編 (2005) 集落・都市編 (1998)

学校教育編 (2002) 社会教育編 (2004)

豊中市史編纂委員会編 豊中市史 豊中市役所

本編 1 (1961) 本編 2 (1959) 本編 3 (1963) 本編 4 (1963)

史料編第 4 (1963)

豊中市水道局編 翔け明日へ「くらしとともに 70 年」 豊中市水道局

上巻 (1998) 通史編 (1999)

豊中市役所市長公室自治振興課編 グラフとよなか 豊中市

No.15 (1979) No.21 (1985) No.25 (1989)

豊中市立上野小学校

創立 30 周年記念誌 「30 年 上野小学校」 1978

豊中市立教育研究所編 聞き書き「水とくらし」

研究紀要 第 94 号 豊中市立教育研究所 1994

研究紀要第 2 集 第 100 号 豊中市立教育研究所 1996

豊中市立熊野田小学校

創立 100 周年記念誌 「くまのだ」 1974

豊中市立小学校・校長会教頭会教育課程部会編

「ふるさとめぐり」(自由裁量時間の活用) 第 2 集 昭和 57 年 (1982)

豊中市立東豊台小学校 「学校要覧」 平成 27 年度 (2015)

阪急バス株式会社社史編集委員会編 「阪急バス 50 年史」 阪急バス 1979

福西 茂 「豊中の史跡・たすね描き」 豊中市立教育研究所 1994

松尾 止 「野畑の歴史」 松尾 止 1988

八坂神社千年祭実行委員会広報委員編 「こころのふるさと 豊中八坂神社」

八坂神社千年祭実行委員会 平成 9 年 (1997)

(順不同・敬称略)

編集後記

東豊台公民分館が生まれて 40 年になるのを記念して、東豊台地域の移り変わりをまとめようと公民分館 史跡ハイキングの仲間 8 人(金子時治・久保井芳紀・佐藤智昭・中安紀夫・服部隆夫・古八英之・三浦 大・矢野洋一)を編集委員として、熊野田村の歴史に沿いながらも、なるだけ「東豊台」に焦点をあてて作業を開始しました。

元々、この地域は旧熊野田村の里山です。目立った遺跡・史跡のない所ですので、地域の方から昔話を聞いたり、図書館に通っての資料集め、熊野田小学校や上野小学校の記念誌等を参考に打合せを重ねて、より正確に、より読みやすくと試行錯誤しながら、地形の成り立ちから古代・中世・近世・近代、そして景観・年表とまとめました。

まだまだ勉強不足もあり、これで良いのかという不安もありますが、この冊子が縁となって、東豊台に愛着を持ち、子ども達の郷土の歴史の糧として何らかのお役に立てば、この上ない幸せと思っています。

この冊子の制作については、豊中市教育委員会生涯学習課の方をはじめ、一枚の写真や一片の資料の入手にも、多くの方々の善意と協力とご尽力をいただきましたことに対しまして、心から感謝し御礼申し上げます。

平成 28 年 (2016) 3 月 31 日

矢野 洋一

＜史跡ハイキング＞

豊中市東豊台公民分館の活動で、私達が住んでいる地域や豊中市の歴史に触れること、健康のために歩くこと、そして仲間づくりをすることが「史跡ハイキング」です。心地良い風に吹かれて、気楽に町歩きを楽しみませんか、お待ちしております。今回の冊子は、史跡ハイキングの会が編集しました。

編集（史跡ハイキングの会）

金子時治	久保井芳紀	佐藤智昭	中安紀夫
服部隆夫	古八英之	三浦 大	矢野洋一

東豊台公民分館 50 周年事業（データ化にあたって）

東豊台公民分館 40 年記念誌として発行された『古里のちから』は、この 10 年間（コロナ禍の時期を除く）、東豊台小学校の 6 年生向けに開催された「地域歴史講座」において、東豊台地域の歴史をより理解してもらうための資料として活用されてきました。

その『古里のちから』を、このたび東豊台公民分館 50 周年の記念事業として、誤字脱字の修正および地名の難読漢字にふりがなを付けるなどの再編集を行い、かつデータ化することとなりました。

データ化により、多くの方々の目に触れる機会が生まれ、皆様の郷土の歴史を知る一助になれば幸いです。

今回の再編集やデータ化するにあたり、豊中市をはじめ多くの方々にご尽力いただきましたことを、心から感謝し御礼申し上げます。

令和 7 年（2025）11 月 16 日

中安 紀夫

東豊台公民分館創立 50 周年記念誌

古里のちから ～東豊台の変遷～

初 版 平成 28 年（2016）3 月 31 日

データ化 令和 7 年（2025）11 月 16 日

発行者 豊中市東豊台公民分館

大阪府豊中市東豊中町 6 丁目 2－1

06（6849）5765